

津名郡北淡町

# おぎわら遺跡

-県道仁井黒谷線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書-

2004.3

兵庫県教育委員会

津名郡北淡町

おぎわら遺跡第4次  
久野々遺跡第7次

-県道仁井黒谷線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書-

2004.3

兵庫県教育委員会

## 例　　言

1. 本書は兵庫県津名郡北淡町久野々に所在する、おぎわら遺跡第4次調査および久野々遺跡第7次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は県道仁井黒谷線道路改良事業に伴うもので、兵庫県洲本土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が、平成9年度に全面調査を実施した。
3. 出土品整理事業は兵庫県淡路県民局の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が、平成15年度に実施した。
4. 本書に使用した方位は国土座標（第V系）の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。
5. 独筆は第4章を柏原正民、第5章をパリノ・サーベイ株式会社矢作健二が担当した他は篠宮正が行った。
6. 編集は篠宮が行った。
7. 発掘調査および報告書作成にあたり、兵庫県洲本土木事務所・北淡町教育委員会・津名郡町村会・秋元知子・伊藤宏幸の各機関・各氏にお世話になった。
8. 発掘調査で出土した遺物、作成した図面・写真などの記録は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管・管理している。



# おぎわら遺跡

県道仁井黒谷線道路改良事業  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

## 例　　言

## 目　　次

第1章 遺跡をとりまく環境 .....	1
第1節 地理的環境 .....	1
第2節 歴史的環境 .....	4
第2章 調査に至る契機と経過 .....	8
第1節 調査に至る契機 .....	8
第2節 調査の経過 .....	10
第3章 おぎわら遺跡第4次調査 .....	11
第1節 調査方法と基本層序 .....	11
第2節 調査の概要 .....	11
第3節 壑穴建物SH01 .....	13
第4節 壑穴建物SH02 .....	17
第5節 壑穴建物SH03 .....	25
第6節 壑穴建物SH11 .....	29
第7節 壑穴建物SH10 .....	30
第8節 壑穴建物SH07 .....	31
第9節 土坑 .....	32
第10節 土器集中SX04・包含層 .....	34
第4章 久野々遺跡第7次調査 .....	35
第1節 調査概要 .....	35
第2節 調査に至る経過と調査成果 .....	35
第3節 まとめ .....	36
第5章 おぎわら遺跡出土土器の胎土分析 .....	37
第1節 試料 .....	37
第2節 分析方法 .....	37
第3節 結果 .....	37
第4節 考察 .....	39
第6章 まとめ .....	43
第1節 要約 .....	43
第2節 おぎわら遺跡の遺物 .....	43
第3節 おぎわら・久野々遺跡群の性格 .....	44

## 図　　版

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図	おぎわら遺跡の位置 (国土地理院 1/200,000 「徳島」「和歌山」) .....	1章1節 ..... 2
第2図	おぎわら遺跡周辺の地形 (国土地理院 1/25,000 「仮星J」) .....	1章1節 ..... 3
第3図	淡路島北部の地形と主要弥生遺跡 .....	1章2節 ..... 5
第4図	淡路島北部の断面地形と遺跡 .....	1章2節 ..... 6・7
第5図	おぎわら遺跡周辺の調査 (北淡町 1/2,500 「北淡町都市計画図18」を縮小) .....	2章1節 ..... 9
第6図	おぎわら遺跡調査区全体 .....	3章2節 ..... 12
第7図	竪穴建物SH01 .....	3章3節 ..... 13
第8図	竪穴建物SH01遺物出土状況 .....	3章3節 ..... 14
第9図	竪穴建物SH01出土遺物1 .....	3章3節 ..... 15
第10図	竪穴建物SH01出土土器拓影 .....	3章3節 ..... 15
第11図	竪穴建物SH01出土遺物2 .....	3章3節 ..... 16
第12図	竪穴建物SH02 .....	3章4節 ..... 17
第13図	竪穴建物SH02遺物出土状況 .....	3章4節 ..... 18
第14図	竪穴建物SH02土器群1出土遺物 .....	3章4節 ..... 19
第15図	竪穴建物SH02土器群2出土遺物1 .....	3章4節 ..... 20
第16図	竪穴建物SH02土器群2出土遺物2 .....	3章4節 ..... 21
第17図	竪穴建物SH02出土遺物 .....	3章4節 ..... 22
第18図	竪穴建物SH02出土土器拓影 .....	3章4節 ..... 23
第19図	竪穴建物SH03・SH11・SH10 .....	3章5節他 ..... 24
第20図	竪穴建物SH03遺物出土状況 .....	3章5節 ..... 25
第21図	竪穴建物SH03土器群2・3・4出土遺物 .....	3章5節 ..... 26
第22図	竪穴建物SH03出土遺物 .....	3章5節 ..... 27
第23図	竪穴建物SH03出土土器拓影 .....	3章5節 ..... 28
第24図	竪穴建物SH11出土遺物 .....	3章6節 ..... 29
第25図	竪穴建物SH11出土土器拓影 .....	3章6節 ..... 29
第26図	竪穴建物SH10出土遺物 .....	3章7節 ..... 30
第27図	竪穴建物SH10出土土器拓影 .....	3章7節 ..... 30
第28図	竪穴建物SH07 .....	3章8節 ..... 31
第29図	竪穴建物SH07出土遺物 .....	3章8節 ..... 32
第30図	竪穴建物SH07出土土器拓影 .....	3章8節 ..... 32
第31図	土坑 .....	3章9節 ..... 33
第32図	土器集中SX04出土遺物 .....	3章10節 ..... 34
第33図	包含層出土遺物 .....	3章10節 ..... 34
第34図	土器集中SX04・包含層出土土器拓影 .....	3章10節 ..... 34
第35図	石筆 .....	4章2節 ..... 36
第36図	調査区全景 (左) と土層堆積状況 .....	4章2節 ..... 36
第37図	各稟度階における鉢物・岩石出現頻度 .....	5章3節 ..... 39
第38図	孔隙・砂粒・基質の割合 .....	5章3節 ..... 40
第39図	胎土の粒径組成 .....	5章3節 ..... 41
第40図	おぎわら・久野々遺跡群 (北淡町 1/2,500 「北淡町都市計画図18」を拡大) .....	6章3節 ..... 45

## 表 目 次

第1表	淡路島北部の主要弥生遺跡 .....	1章2節 ..... 4
第2表	分析資料一覧 .....	5章1節 ..... 37
第3表	薄片観察結果 .....	5章3節 ..... 38
第4表	遺物一覧 .....	47~49

## 図版目次

図版1	遺構	調査地点遠景（南東から） 道路完成後遠景（南から）
図版2	遺構	南斜面竪穴建物群（南西から） 竪穴建物SH01（西から）
図版3	遺構・遺物	竪穴建物SH02（南西から） 竪穴建物SH02出土土器
図版4	分析	土器胎土薄片
図版5	遺構	調査前全景（南から） 調査地点全景（南東から）
図版6	遺構	竪穴建物SH01（西から） 竪穴建物SH01遺物出土状況（南から）
図版7	遺構	竪穴建物SH02遺物出土状況（東から） 竪穴建物SH02遺物出土状況（北から）
図版8	遺構	竪穴建物SH03・SH11（南西から） 竪穴建物SH03遺物出土状況（西から）
図版9	遺構	竪穴建物SH10（北から） 竪穴建物SH10堆積状況（西から） 土器集中SX04（南から）
図版10	遺構	西斜面遺構群（南から） 竪穴建物SH07（西から）
図版11	遺物	竪穴建物SH01出土土器
図版12	遺物	竪穴建物SH01出土土器
図版13	遺物	竪穴建物SH01・SH10出土土器
図版14	遺物	竪穴建物SH02土器群1出土土器
図版15	遺物	竪穴建物SH02上器群2出土土器
図版16	遺物	竪穴建物SH02土器群2出土土器
図版17	遺物	竪穴建物SH02土器群2出土土器
図版18	遺物	竪穴建物SH02出土土器
図版19	遺物	竪穴建物SH03出土土器
図版20	遺物	竪穴建物SH03出土土器
図版21	遺物	竪穴建物SH03出土土器
図版22	遺物	竪穴建物SH11出土土器
図版23	遺物	竪穴建物SH07・土器集中SX04出土土器
図版24	遺物	包含層出土土器
図版25	遺物	石器

# 第1章 遺跡をとりまく環境

## 第1節 地理的環境（第1・2図）

### 1. おぎわら遺跡

おぎわら遺跡は淡路島北部の津名郡北淡町久野々に所在している。

おぎわら遺跡の立地する津名山地は、久野々・仁井・舟木周辺で淡路島の西浦と東浦の分水嶺となり、鞍部である仁井を富島港のある北淡町から東浦町久留麻までの東西の海岸を結ぶ交通路となっている。この鞍部は標高175m以上を測っており、久野々断層などの東西方向の断層や開析谷も含めて入り組んだ地形を展開している。降水量が少ないため、この開析谷を利用した溜め池が数多く存在している。津名郡北淡町久野々に所在するおぎわら遺跡はこの山地鞍部の南辺の標高250mを越える丘陵・台地上に立地する遺跡である。

遺跡から播磨灘に面した西浦の海岸までは約2.5km、大阪湾側の東浦の海岸までは約4.5kmの距離になる。高地に立地するため遺跡周辺からは播磨灘がよく見渡せ小豆島・家島諸島から播磨の海岸や山々まで臨むことができる。さらに今回調査を行った地点の周辺からは東浦を通して六甲山をはじめとする大阪湾北岸まで見通すことができる。

### 2. 淡路島の地形

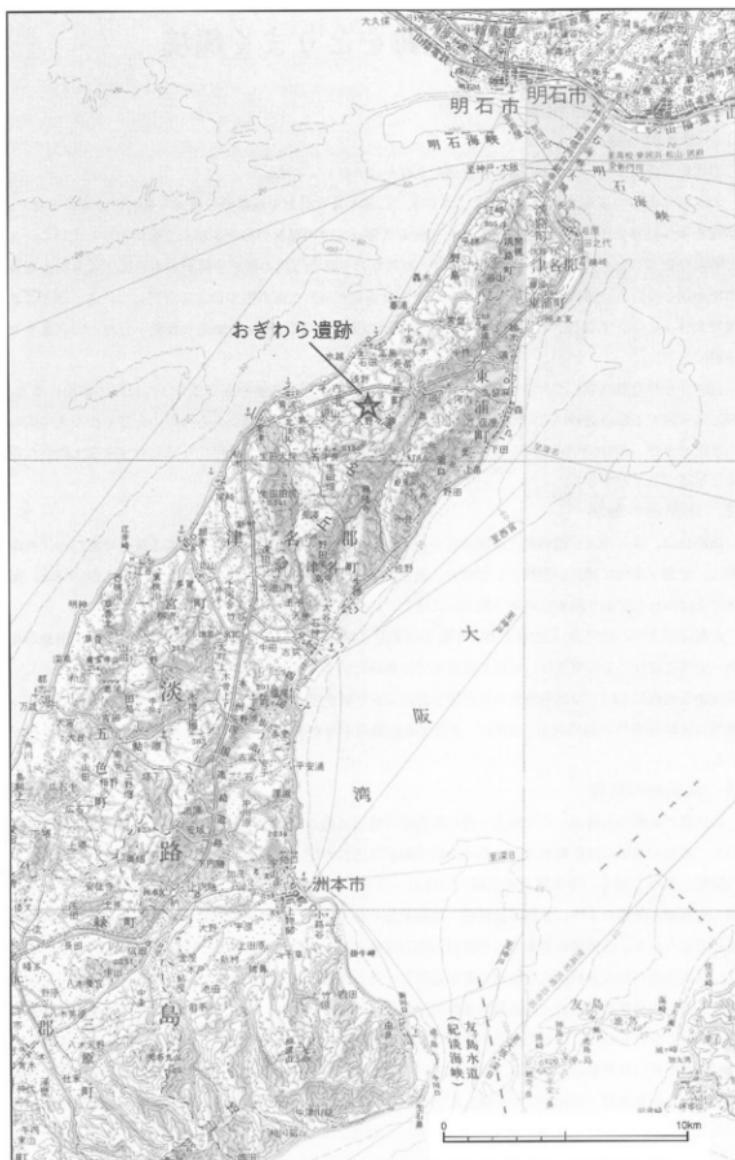
淡路島は、瀬戸内海を播磨灘と大阪湾に分けるだけではなく、畿内と西国を隔てる位置にあたる。淡路島は、北東-南西に細長い形状をしており、長さ約53km、北西-南東方向の幅は北部で狭く約5~8km、南下するにつれて広がり洲本市の南で約22kmに達し、周囲203kmの細長い島である。

北部には北半の妙見山（522m）および南半の先山（448m）を最高点とする起伏の小さな津名山地が北東-南西に走り、その東西はいずれも傾斜地で海岸線に若干の耕地を形成している。

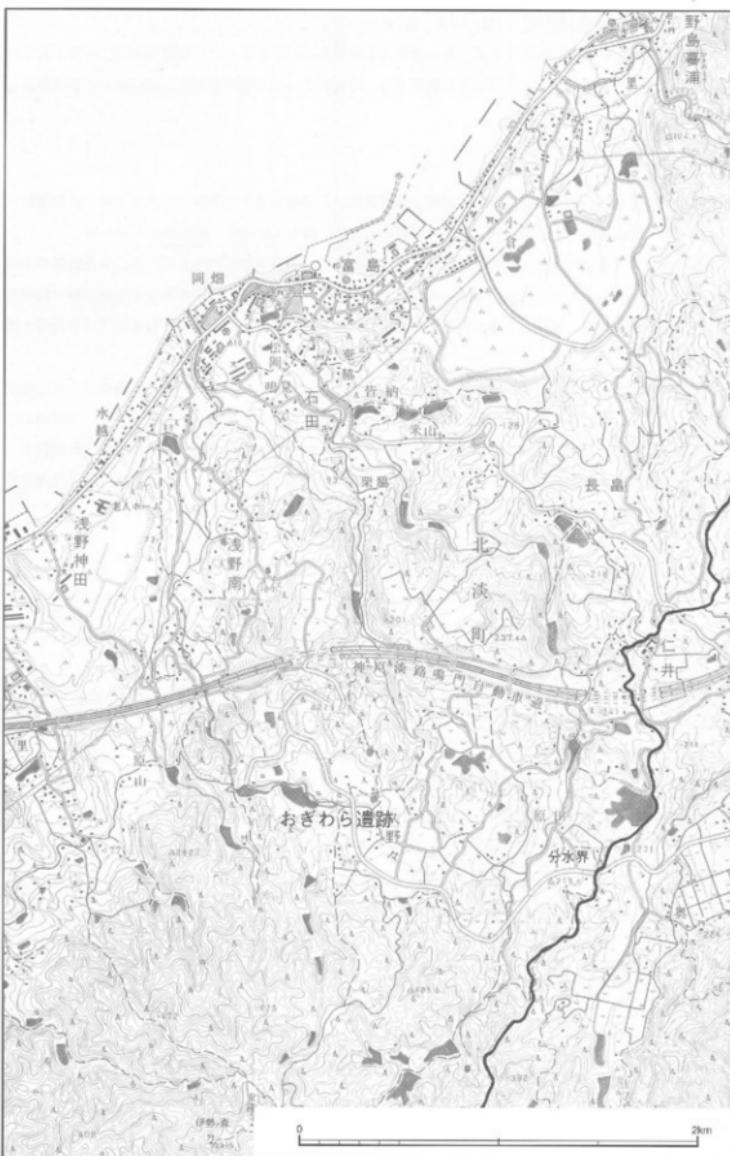
中部から南部にかけては島内最大の平坦地である三原平野があり、そこを洲本川、三原川が流れている。南部は淡路最高峰の論鶴羽山（608m）を有する論鶴羽山地が東西に走り、断崖絶壁の海岸線を形成している。

### 3. 淡路島の地質

淡路島の地形の大勢は、この地方一帯の第四紀の構造運動と密接に対応しているものとみられる。すなわち、本島の南縁には活断層とされる中央構造線が東西にのび、論鶴羽山地は、東方の和泉山脈から西方の讃岐山脈へと続く、中央構造線北縁の山地の一部分と位置づけられる。一方、津名山地は、その南東縁・北西縁に後述のように多数の活断層・拗曲が知られており、これらの活動の累積によって生まれた山地と考えられる。活断層の北東方への延長は明石海峡を経て六甲山地南縁部へ連続することが知られており、津名山地の形成過程は六甲山地の隆起過程と一連の構造運動として位置づけられる。淡路島の地形は東西方向の中央構造線に沿った南部の論鶴羽山地と、それより約30°北よりに角度を変えた北部の脊梁山地に大きく分けられる。この北部の山地は明石海峡を隔てて六甲山地・北摂山地へと続く。この北部の山地の地形形成には断層活動が大きく関与していることは、兵庫県南部地震（1995年）で大きく活動した野島断層や、伏見地震（1596年）で活動したと考えられる東浦断層や楠本断層等の存在からも伺われる。これらの断層によって海岸には切り立った崖が迫っており、また山地と丘陵・台地の境界が比高差50~100mの崖状の地形によって大きく分けられている。



第1図 おぎわら遺跡の位置



第2図　おぎわら遺跡周辺の地形

## 第2節 歴史的環境 (第3・4図、第1表)

おぎわら遺跡は北淡町に所在する弥生時代後期の遺跡である。したがって、淡路島北部に所在する津名郡内の弥生時代の遺跡を中心に時代ごとに概観する。時代によって立地や密度に非常に偏った分布を示している。

### 1. 縄文時代

縄文時代の遺跡は、北淡町舟木遺跡・育波堂の前遺跡・淡路町まるやま遺跡・ナキリ遺跡・給田遺跡・砂連尾遺跡・岡山遺跡・大谷川遺跡・東浦町船頭ケ内遺跡・楠本下林遺跡・仙遺跡などがある。

淡路町まるやま遺跡では縄文時代草創期の有舌尖頭器などの石器が多く出土している。また時期不明の重飾りが出土している。有舌尖頭器は北淡町舟木遺跡でも出土している。北淡町育波堂の前遺跡では縄文時代早期・前期・後期・晚期の土器が出土しており、東浦町船頭ケ内遺跡・楠本下林遺跡では早期の土器が出土している。

東浦町個遺跡では中期・後期・晚期の住居跡や貯蔵穴が注目される。遺物は前期から晚期にかけて幅広く出土しており、特に後期の土器がまとまって出土している。ほかに各種の自然遺物も多く、当時の食生活や生業が復原できる良好な資料が出上している。淡路町ナキリ遺跡では前期末・中期初頭・後期後半～晚期の土器が出土している。淡路町給田遺跡では後・晚期の土器が採集されている。淡路町砂連尾遺跡や岡山遺跡では後期の土器と石器が出土している。大谷川遺跡では晚期の土器が出土している。

第1表 淡路島北部の主要弥生遺跡

No.	遺跡の名称	弥生					No.	遺跡の名称	弥生					No.	遺跡の名称	弥生				
		I	II	III	IV	V			I	II	III	IV	V			I	II	III	IV	V
ア 東石ヶ谷遺跡							16	詩文字岩遺跡						39	今出川遺跡					
イ 池上口ノ池遺跡							17	色目遺跡						42	円城寺遺跡					
ウ 頭高山遺跡							18	湯の谷遺跡						43	桑ノ戸遺跡					
エ 表山遺跡							19	サツブ遺跡						44	上殿遺跡					
オ 新方遺跡							20	土穴遺跡						45	本田谷遺跡					
カ 吉田南遺跡							21	高尾遺跡						46	畦ヶ内遺跡					
キ 今津遺跡							22	まるやま遺跡						47	高山遺跡					
ク 出合遺跡							23	塩垂遺跡						48	鶴戸遺跡					
ケ 日輪寺遺跡							24	塙豐遺跡						49	才川原遺跡					
コ 玉津田中遺跡							25	堤豊遺跡						50	延命寺遺跡					
1 貢蛇神社遺跡							26	楠本下林遺跡						51	黒谷遺跡					
2 舟木遺跡							27	佃遺跡						52	長谷川原大池遺跡					
3 尾花遺跡							28	尼ヶ岡遺跡						53	長谷A遺跡					
4 上ノ間池遺跡							29	禿山遺跡						54	品ヶ谷遺跡					
5 井内谷遺跡							30	原瀬遺跡						55	遠板遺跡					
6 穴郷遺跡							31	白山岡遺跡						56	宮ノ原遺跡					
7 猿田遺跡							32	白山真土遺跡						57	丸塚遺跡					
8 おぎわら遺跡							33	百田遺跡						58	江原遺跡					
9 久野々遺跡							34	河内遺跡						59	矢坪遺跡					
10 金坪遺跡							35	千木遺跡						60	かじやべ遺跡					
11 雨堀遺跡							36	行免形遺跡						61	油留手遺跡					
12 妙神谷遺跡							37	大坂遺跡						62	天神遺跡					
13 長守遺跡							38	水木遺跡						63	古城江A遺跡					
14 育波堂の前遺跡							40	船瀬内遺跡						64	火打角遺跡					
15 室津土井遺跡							41	造永久保遺跡						65	馬場遺跡					



第3図 淡路島北部の地形と主要弥生遺跡

## 2. 弥生時代

弥生時代前期から中期中頃までの遺跡としては、北淡町貴船神社遺跡や北淡町育波堂の前遺跡や東浦町今出川遺跡、東浦町佃遺跡など海岸付近の比較的低地に点的に遺物は発見されてはいるものの、遺構はほとんど検出されていない。唯一津名町天神遺跡で中期前半から中頃の堅穴建物がまとまって調査されている。中期後半から遺跡がわずかに増加しはじめ、品ヶ谷遺跡で確認されている。標高50m前後の東浦町白山真土遺跡では中期末から後期の上器が出土している。

これに対し弥生時代後期に入ると遺跡数は爆発的に増加し、そのほとんどが標高100mを越える丘陵・台地上に立地するようになる。

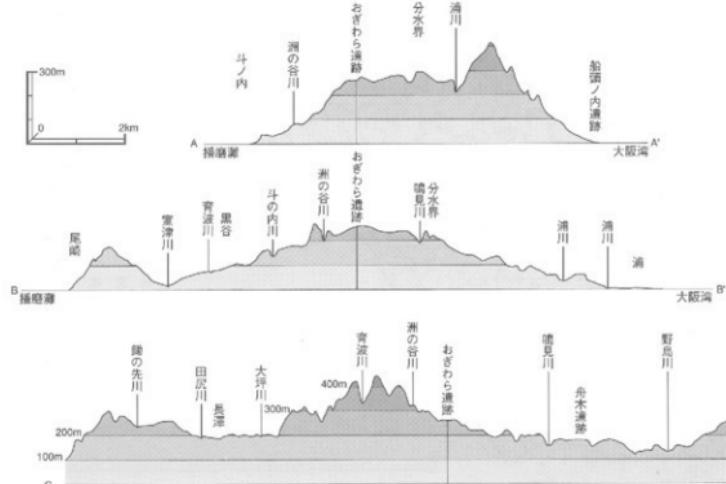
今回報告する標高255m～270m前後の北淡町おぎわら遺跡や標高260m～270m前後の北淡町久野々遺跡では堅穴建物跡が多数検出されており、周辺には金坪遺跡、雨堤遺跡などがある。おぎわら遺跡の約3km北東にある標高150m前後の北淡町舟木遺跡でも堅穴建物跡が多数検出されている。

淡路町塩坂遺跡・塩坂西遺跡の遺跡群は近接して存在しており堅穴建物跡が検出されている。北端の淡路町高尾遺跡では後期後半の土器が出土した。また標高120m前後の東浦町禿山遺跡・標高120m～130m前後の尼ヶ岡遺跡の遺跡群でも堅穴建物跡が多数検出されている。標高120m前後の東浦町行免形遺跡では堅穴建物2棟などが調査され、壇入土器も比較的多く出土している。

低地に位置する標高20m前後の東浦町楠本下林遺跡では堅穴建物が調査されているが、低地に立地する遺跡はわずかである。北淡路で検出された堅穴建物跡の9割以上は弥生時代後期に位置づけられ、さらに眺望の良い丘陵上に立地していることは大きな特徴である。

弥生時代後期の墓は北淡町久野々遺跡で4基の方形周溝墓と津名町林遺跡で2基の方形周溝墓が調査されている。また土器棺墓が佃遺跡で調査されているが、建物跡に比べ墓の調査例は少ない。

なお、南淡路で数多く出土している銅鐸・銅劍などの青銅器は北淡路では舟木遺跡の青銅片を除いて出土していない。



第4図 淡路島北部の断面地形と遺跡

明石海峡をはさんだ北側では、明石川流域に弥生前期から後期まで継続する神戸市西区玉津田中遺跡や新方遺跡などが存在し、淡路北部の様相と大きく異なっている。後期初頭では神戸市垂水区舞子石ヶ谷遺跡や神戸市西区表山遺跡が存在している。共に明石海峡や播磨灘を望む高地性集落であり、表山遺跡は環濠を作っている。なお、日輪寺遺跡などは後期に丘陵上に集落を営む点で淡路島北部と似通っている遺跡もある。

### 3.古墳時代

古墳時代に入ると、丘陵・台地上の集落遺跡はほとんど消滅してしまい、かえって狭い海岸線に遺跡が出現するが、これらの遺跡は一般的な集落とは異なる製塩遺跡で北淡町貴船神社遺跡・富島遺跡・浜田遺跡、東浦町引野遺跡などがある。北淡町貴船神社遺跡では石敷製塩炉が多数調査され、北淡町富島遺跡や東浦町引野遺跡では古墳時代前期の製塩土器が多く出土している。また、北淡町浜田遺跡では古墳時代後期～奈良時代の製塩土器が多く出土している。古墳時代の堅穴建物跡は東浦町一本松遺跡で検出され、津名町天神遺跡では掘立柱建物で構成される集落が調査されている。

また、古墳は少なく、前・中期の古墳はほとんど認められず、淡路町石の寝屋古墳群や北淡町築鼻山古墳群、東浦町丸山古墳、津名町奥穴見古墳などがある。石の寝屋古墳群は明石海峡を望む後期の大型横穴式石室を有する8基の円墳で構成されている。築鼻山古墳群は6世紀の堅穴式小石室を埋葬施設とする円墳で2基調査されている。

### 4.古代以降

古代におけるおぎわら遺跡周辺は、南海道の淡路国津名郡10郷のうち、育波郷に含まれていた。古代寺院は津名町志筑庵寺が調査されており、白鳳期の瓦が出土している。奈良～平安時代の遺跡も東浦町佃遺跡以外には調査例が少なく、東浦町藤ノ木遺跡や佃遺跡で平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物跡が調査されている。中世末は北淡町井ノ谷遺跡で土坑墓や外町遺跡で掘立柱建物跡が検出されている。

久野々には栗村山常隆寺があり、寺伝によると延暦21（805）年、桓武天皇が皇弟早良親王の靈を慰めるための勅願寺として建立したもので靈安寺と呼ばれ、大永年間（15世紀前半）に兵火にあったと伝えている。久野々の集落内を常隆寺への参道が通り、周辺にもいくつかの町石が残されている。

久野々の地名は戦国期から見られ、江戸時代元和元年からは阿波国徳島藩領津名郡久野々村となり、明治10年には仁井村・舟木村・長畠村と合併して仁井村の一部となる。大正時代には仁井村の大字久野々組となり、昭和30年に北淡町久野々となった。平成8年度には久野々工区の圃場整備は完成した。

このように淡路島は政治的・社会的な交通の要衝として位置づけることができる。昭和60年6月に大鳴門橋が開通、平成10年4月には明石海峡大橋が開通した。これにより、淡路島は本州・四国と陸続きで結ばれ、新たな交通の要衝として位置づけられた。



## 第2章 調査に至る契機と経過

### 第1節 調査に至る契機（第5図）

#### 1. おぎわら遺跡

おぎわら遺跡は淡路島北部の津名郡北淡町字久野々に所在する。久野々・仁井・舟木周辺では以前から所々で弥生土器を採集することができ、北淡町立歴史民俗資料館にも一部の遺物が収蔵されている。近辺でも雨堤遺跡や金坪遺跡・穴郷遺跡などの散布地が知られていた。

おぎわら遺跡は、昭和62年度に国営農地開発事業及び県営一般農道整備事業の工事中に、淡路考古学研究会によって発見された。そこで、昭和63年2月に確認調査（おぎわら遺跡第1次）を実施したところ、遺構や遺物が出土し、明確な遺跡の存在が明らかになった。このため、昭和63年10月に兵庫県教育委員会が全面調査（おぎわら遺跡第2次）を実施した。調査の結果、標高262m～268mの地点で、弥生時代後期の竪穴建物6棟、溝21条、土坑7基、柱穴などの遺構を検出し、多量の弥生土器が出土した。

これらの調査から、おぎわら遺跡はさらに周辺に広がっていると考えられた。

#### 2. 久野々遺跡

久野々遺跡はおぎわら遺跡の南方に位置している。平成元年、仁井地区で計画された県営圃場整備事業に先立って、久野々工区全域の分布調査を北淡町教育委員会の依頼を受けた淡路考古学研究会が実施し、広い範囲で弥生時代を中心とする遺物の散布が認められた。

そのため平成元年度と平成2年度に、おぎわら遺跡の南側に広がる久野々遺跡で合計87箇所の確認調査（久野々遺跡第1次）が津名郡町村会によって実施され（事業主体北淡町教育委員会）、25箇所以上の地点で弥生時代および中世から近世の遺構や遺物包含層が確認された。

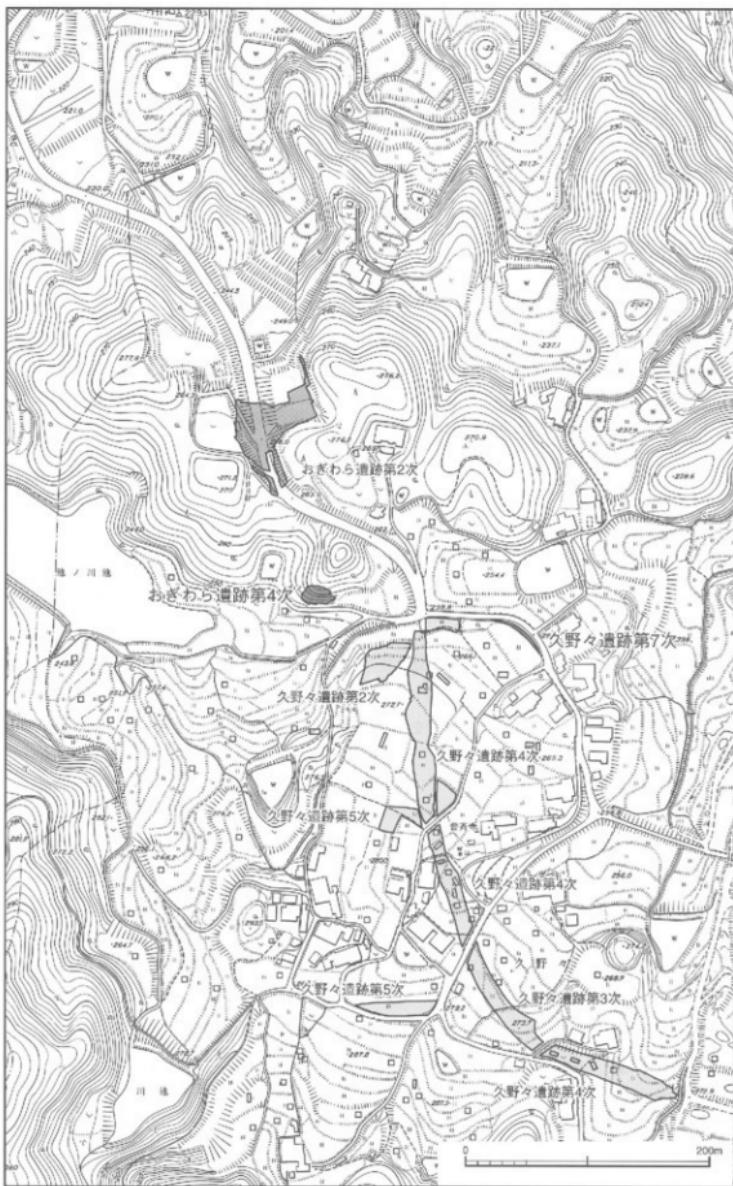
この確認調査の結果を受けて、圃場整備事業によって破壊される部分について北淡町教育委員会が平成7年度に、一部の全面調査（久野々遺跡第2次）を実施し、弥生時代後期の竪穴建物3棟や溝・段状遺構などを検出した。

同じく平成7年度には兵庫県洲本土地改良事務所が計画する圃場整備内の一般農道整備事業に伴って、平成8年1月から3月にかけて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が、Ⅲ区の全面調査（久野々遺跡第3次）を実施した。中世から近世の溝や土坑などを検出し、弥生後期の土器や中世・近世の遺物が出土した。

平成8年度には一般農道整備事業の残るⅠ区の全面調査（久野々遺跡第4次）及びⅡ区・Ⅳ区の確認調査を行い、Ⅱ区の一部については、平成8年5月から8月にかけて全面調査を実施した。Ⅰ区の全面調査では、弥生時代後期の竪穴建物3棟、方形周溝墓4基、土坑8基、溝、柱穴などが検出され、弥生後期の土器や中世・近世の遺物が出土した。

平成8年7月から平成9年3月にかけて、県営圃場整備事業に伴う調査（久野々遺跡第5次調査）が北淡町教育委員会により実施された。竪穴建物2棟、土坑、溝、柱穴などが検出され、多量の弥生後期土器や中世の遺物が出土した。

久野々遺跡は、圃場整備事業や農道整備事業によって影響のある部分の調査がおこなわれたのみであり、さらに広がっていることが確認されている。



第5図 おぎわら遺跡周辺の調査

## 第2節 調査の経過

### 1. 発掘調査の経過

平成8年度に兵庫県洲本土木事務所から県道仁井黒谷線道路改良事業を計画しており、津名郡北淡町久野々地区における埋蔵文化財の照会があった。このため、分布調査を行い確認したところ、南北に走る農道の東側のA地点は久野々遺跡の範囲内であり、南北に走る農道の西側のB地点は昭和63年に調査を実施したおぎわら遺跡の隣接地であり、おぎわら遺跡が広がっている可能性が高いと判断した。そこで、確認調査を実施し、埋蔵文化財の存在の有無を判断する必要があると回答した。

確認調査は、兵庫県洲本土木事務所からの埋蔵文化財確認調査の依頼に基づき平成9年5月27日と28日の両日に調査を実施した。その結果、おぎわら遺跡の隣接地（おぎわら遺跡第3次）では遺構・遺物を検出し、おぎわら遺跡が当該地まで広がっていることを確認した。また久野々遺跡の範囲内（久野々遺跡第6次調査）でも遺構・遺物を検出した。これにより、県道仁井黒谷線道路改良事業により削平などの影響を受ける部分については全面調査の必要がある旨回答した。

おぎわら遺跡（おぎわら遺跡第4次）については、県道仁井黒谷線道路改良事業の拡幅による法面整形により削平されるため、兵庫県洲本土木事務所から埋蔵文化財発掘調査の依頼が提出された。調査依頼に基づき、平成9年6月23日～平成9年7月2日まで、延べ8日間で、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が全面調査を実施した。

久野々遺跡（久野々遺跡第7次調査）については、県道仁井黒谷線道路改良事業の拡幅による法面整形により削平されるため、兵庫県洲本土木事務所からの埋蔵文化財発掘調査依頼に基づき、平成9年11月12日に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査を実施した。

### 2. 出土品整理の経過

出土品の整理は、平成15年度の単年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。内容は出土遺物の水洗、注記を行った後、接合・補強を行い、実測や拓本・写真撮影するものを選択した。その後、実測・拓本を行い、復原・写真撮影を実施した。さらに遺物実測図と造構図と共にトレース・レイアウトを行い、原稿執筆・編集を行った。

### 3. 調査の担当

#### 発掘調査

おぎわら遺跡確認調査（調査番号970201）・久野々遺跡確認調査（調査番号970178）

調査担当： 篠宮 正・野村辰右

おぎわら遺跡全面調査（調査番号970207）

調査担当： 篠宮 正・野村辰右

久野々遺跡全面調査（調査番号970359）

調査担当： 柏原正民

#### 出土品整理

水洗・注記： 家光和子・伊藤ミネ子・江口初美・衣笠雅美・長谷川洋子・早川亜紀子

接合・補強・復原： 石野照代・大仁克子・藏幾子・中田明美・西野淳子・眞子ふさ恵・吉田優子

実測・拓本・製図： 杉本淳子

## 第3章 おぎわら遺跡第4次調査

### 第1節 調査方法と基本層序

調査は現況が山林であったため、立木の伐採を行い、表土および無遺物層を重機により掘削した。それ以下の包含層の掘削および遺構検出、遺構掘削は人力で行った。

調査に先立ち、調査区を設定した。調査区は国土座標第V系により10m方眼で地区割りを行い、南北方向はアルファベットで北から南にA・B・C、東西は数字で西から東に1・2・3と表した。北西角の杭を地区の名称とした。ちなみにB3の座標値はX = -163.990、Y = 54.960である。この地区割りは測量の基準や遺物の取り上げで使用した。

遺跡の記録は写真撮影と図面で行った。写真撮影は35mmモノクロ、35mmリバーサル、35mmネガカラーを中心に撮影を行い、重要な写真是大判サイズのカメラでモノクロ、リバーサルの撮影を行った。図面は全体図のほかに個別の遺構図を作成し、必要に応じて遺物出土状況図・土層図を作成した。

調査地点の土の堆積は丘陵の斜面であるため、それほど厚くはなく、基本土層は、上から順に、第Ⅰ層：表土、第Ⅱ層：黄褐色細紗、第Ⅲ層：基盤層である。本来であれば第Ⅱ層中で検出できるはずであるが、困難であったため第Ⅲ層上面を検出面とした。

### 第2節 おぎわら遺跡第4次調査の概要（第6図・図版1・5）

今回の調査地点は、昭和63年度に調査を実施した地点の南側約100mの地点にある。南西に張り出した尾根の標高263.7mから257.0mの南斜面と西斜面に立地している。南側は現県道に面しており、崖になっている。それ以外の東・北・西側は山林になっている。調査は県道の抵帳に伴い、法面整形されるため、わずかな幅巾であるが、大きな面積となっている。

検出した遺構は竪穴建物6棟（SH01・SH02・SH03・SH07・SH10・SH11）、土坑4基（SK05・SK06・SK08・SK09）、柱穴（P1～P8）、土器集中地点（SX04）などである。

竪穴建物は傾斜地に立地しているため、山側の一部しか残存していない。いずれも方形で、一辺3.2m～8.0mの規模がある。竪穴建物SH01とSH02は、ともに床面中央部に被熱赤変部が存在しており、北東部側から竪穴建物が機能を失った後の土器廃棄状況を示す多量の弥生土器が出土した。

竪穴建物SH02は他の竪穴建物より高い場所に位置し、標高262m前後に存在している。

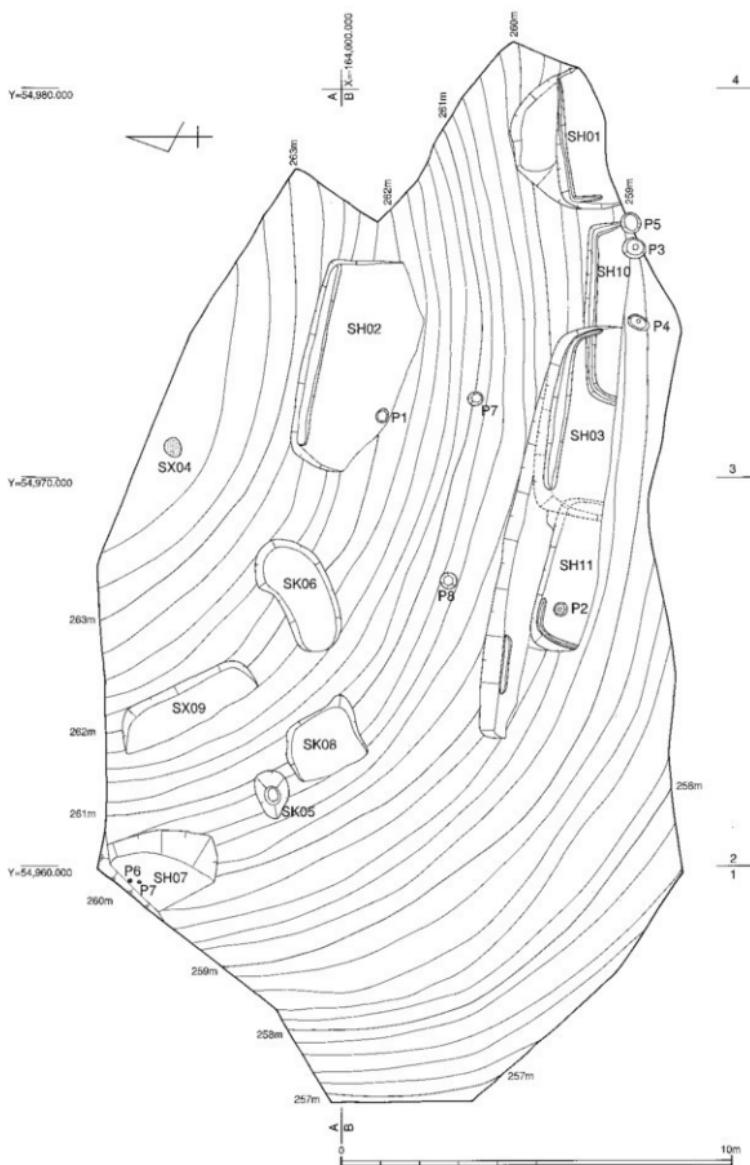
竪穴建物SH03・SH10・SH11は重複関係にあり、東側に隣接する竪穴建物SH01も含めて、標高259.5m前後の標高にまとまっている。

竪穴建物SH07は西側斜面に立地しており、竪穴建物SH03などとほぼ同じ標高260m前後に位置している。

土坑は南西斜面から西斜面で検出しているが、遺物がほとんど出土していないため、その性格は不明である。

出土遺物は、土器がコンテナ21箱と石器が出土した。土器は弥生時代の土器のみであり、他の時期のものは出土していない。弥生土器は弥生時代後期に属し、甕が大半を占めており、鉢・壺・高杯・器台などがある。石器は磨石・凹石・石鏃がある。

今回の調査地点での遺構の分布から、遺跡はさらに広がる様相が伺えた。



第6図 おぎわら遺跡調査区全体

### 第3節 壇穴建物SH01 (第7~11図・図版2・6・11~13)

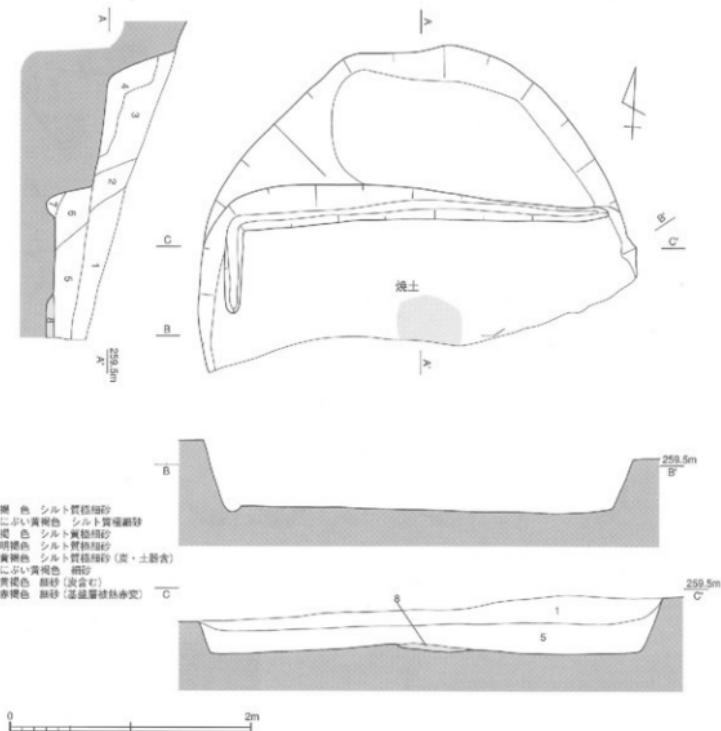
壇穴建物SH01は調査区の東端のB3区に位置する。壇穴建物の南側は県道による削平のため残っていない。

平面形は東西0.6m、南北1.5m以上の方形である。北側の一筋高い部分に半円形の張り出しが存在する。土層の状況から同時に存在したことが伺える。床面の標高は259.1mを測り、張り出し部の標高は259.5mを測る。西壁の高さは最大0.55mで、北壁および西壁の一部には壠溝がめぐっている。幅20cm前後、深さ10cmである。南辺中央部分に比熱赤変部が存在している。東西0.6m、南北0.4m以上の円形を呈すると考えられる範囲に赤変部が認められる。深さは6cmである。柱穴は確認できなかった。

遺物の出土状況は大きく二群に分けられる。北側に張り出した床面(土器群1)より高坏の坏部が出土した。そのほかの土器は北東側隅(土器群2)の5層上面に集中して出土していることから、土器群2は壇穴建物廃絶後の上器廃棄状況を示すものと考えられる。

遺物は茎生土器(1~44)のみである。土器群1からは高坏13が出土した。浅い坏部のみである。

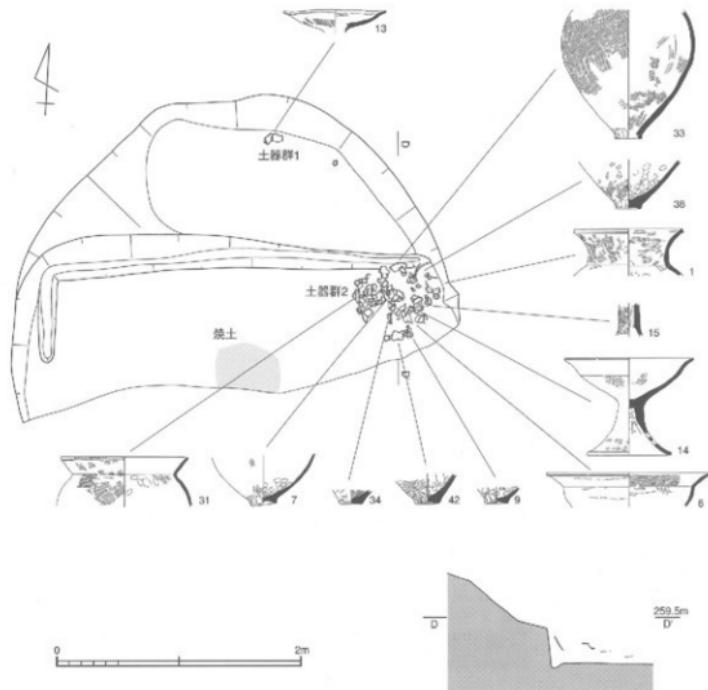
土器群2(1~12・14~17・19~24・26~33・35~37・39~44)は壺・壺・鉢・器台・高坏がある。広口壺1は外反する口頭部の内外ともにヘラミガキを行っている。広口壺2は外反する頭部で、タキ成形



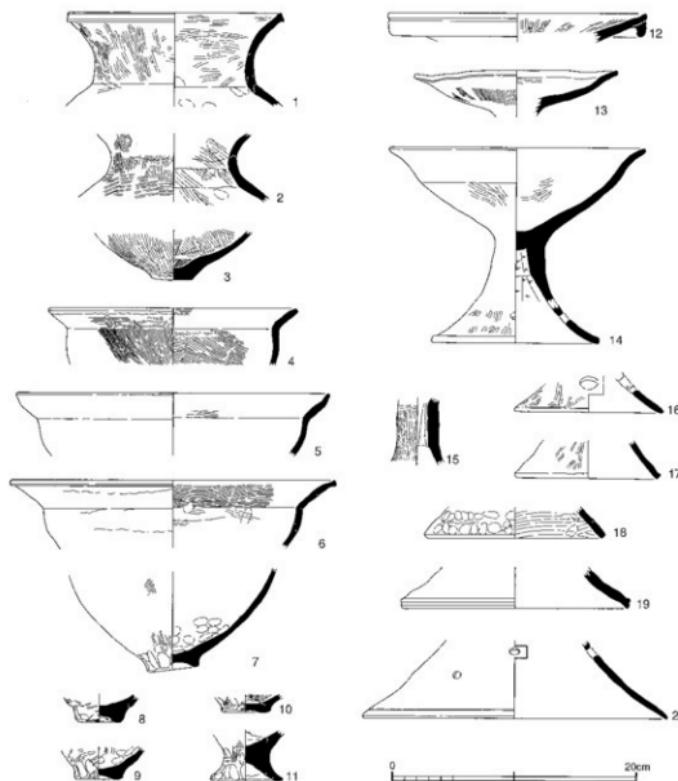
第7図 壇穴建物SH01

後ハケ調整を行っている。内面は粘土帯の接合痕が残る。壺底部3は外面ヘラミガキ、内面ハケ調整である。鉢4は外反する口縁部をもち、内外ともハケで仕上げている。鉢5は外反しや内弯する口縁部をもつ。鉢6は外反する口縁部をもち、粘土帯の接合痕が残る。鉢底部7~10は上げ底で指頭圧調整を行っている。底部11は低い脚を付けている。器台12は垂下する口縁部をもつ。高壺14は口縁部にわずかな棱をもち、外反する。高壺15は脚部でヘラミガキを行っている。脚16は大きめの円孔透かしをあける。脚19は端部に凹線文をめぐらす。脚20は円形の二段の透かし孔をあける。

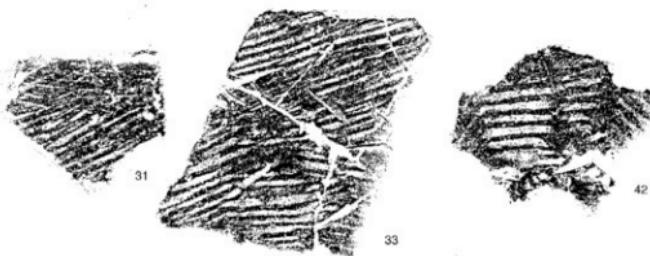
壺21は短い頸部から外反する口縁部をもつ。壺22~25は外反もしくは屈曲する口縁をもつが、残りが良くなく、調整は不明である。壺26・27は外反する口縁部をもち、体部外面は右上がりのタタキ仕上げの後、ハケ調整で仕上げている。壺28は屈曲する口縁をもち、体部外面は右上がりのタタキ痕が残る。壺30は屈曲する口縁部の端部は刻み目風のタタキで仕上げている。体部外面は右上がりのタタキ痕が残る。壺31・32は口縁部をタタキ出し、ハケ調整で仕上げている。端部は刻み目風のタタキで仕上げている。底部34は内面にハケによるクモの巣状の回転調整を行っている。底部35は厚みがあり、体部外面は右上がりのタタキ痕が残る。底部36・37・39~43は上げ底で指頭圧調整を行っている。体部外面は右上がりのタタキ痕が



第8図 穹穴建物SH01遺物出土状況



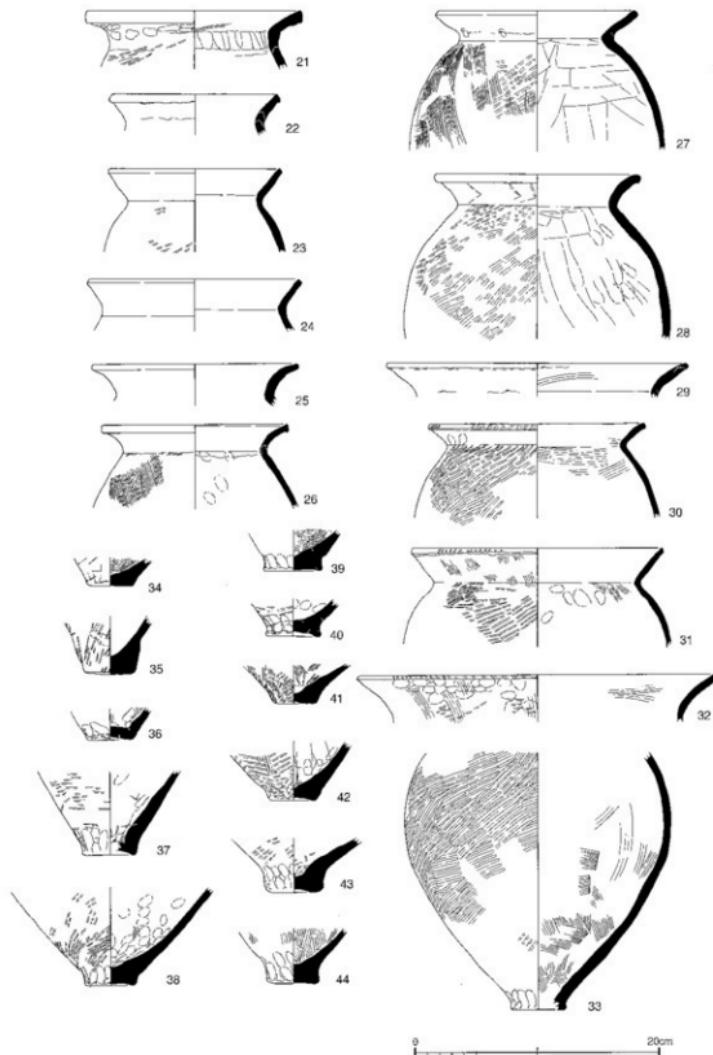
第9図 竪穴建物SH01出土遺物1



第10図 竪穴建物SH01出土土器拓影

残る。底部44は内外ともハケ調整で仕上げており、底部は指頭圧調整を行っている。

そのほか底部38は上げ底で指頭圧調整を行っており、体部は右上がりのタタキ成形である。

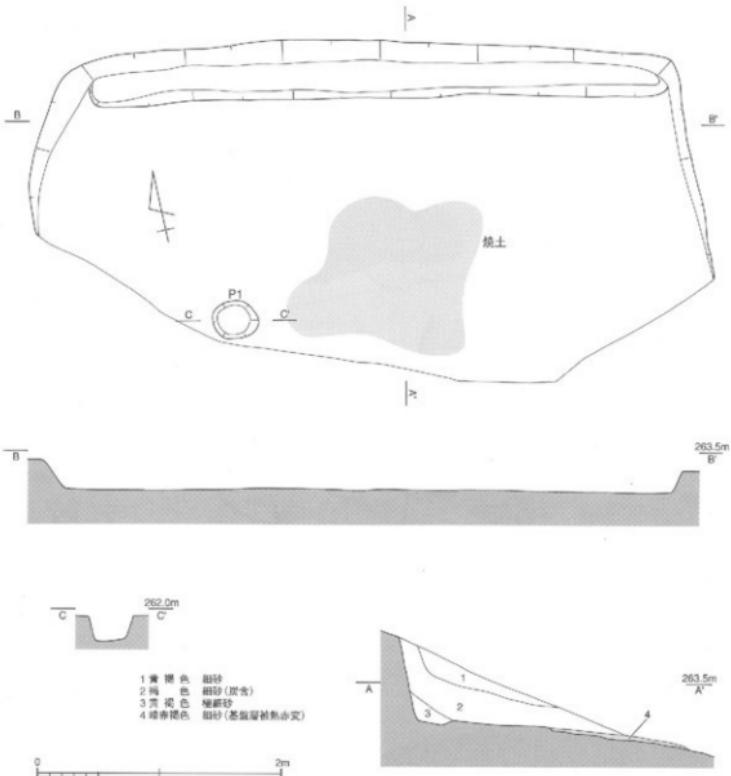


第11図 壁穴遺物SH01出土遺物2

## 第4節 壁穴建物SH02 (第12~18図・図版3・7・14~18)

壁穴建物SH02は壁穴建物SH01の北側斜面上のA・B3区に位置している。傾斜地に立地しているため、南側の半分以上は残っていない。平面形は東西5.6m、南北2.8m以上の方形である。床面の標高は263.2mを測る。北壁の高さは最大0.9mで、壁際には壁溝がめぐっている。幅35cm前後、深さ10cmである。壁穴建物跡の中央部分に近い床面で東西1.4m×南北1.5m以上の範囲で、最大8cmの厚さで被熱赤変していた。柱穴P1は被熱赤変部の西側に位置し、直径36cm、深さ23cmを測る。

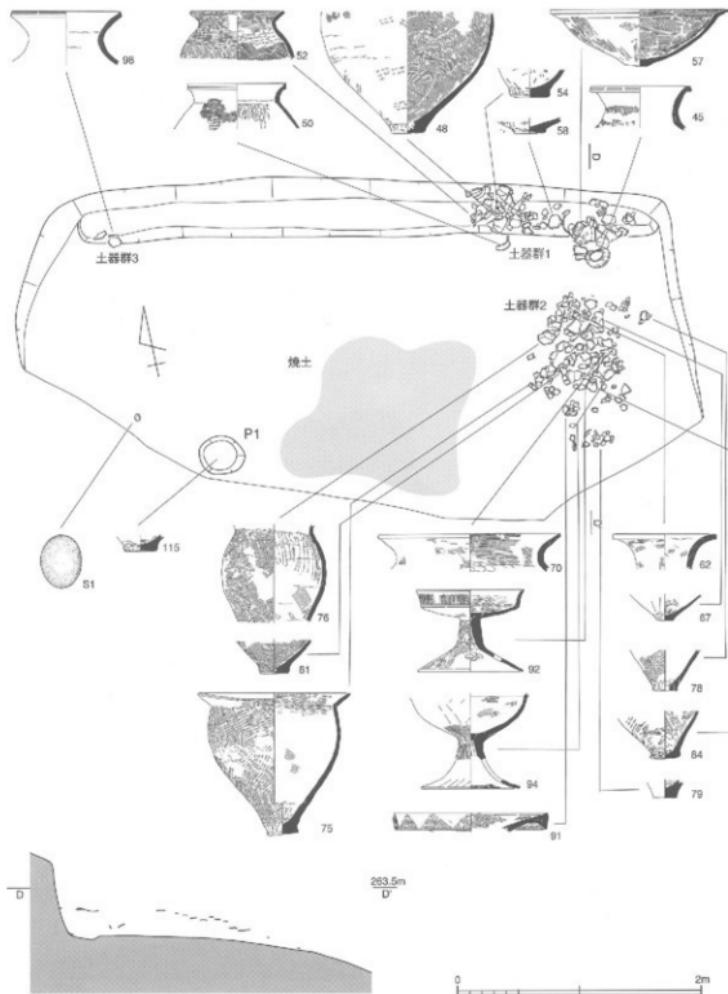
遺物は弥生土器(45~115)と石器(S1)が出土している。遺物の出土状況は大きく三群に分けられ、東側二群(土器群1・土器群2)と西側一群(土器群3)とに分けられる。土器群1は北壁際に位置し、床面からやや浮いた第3層の上部から谷部に向かって傾斜した状況で出土している。土器群2は土器群1の南側



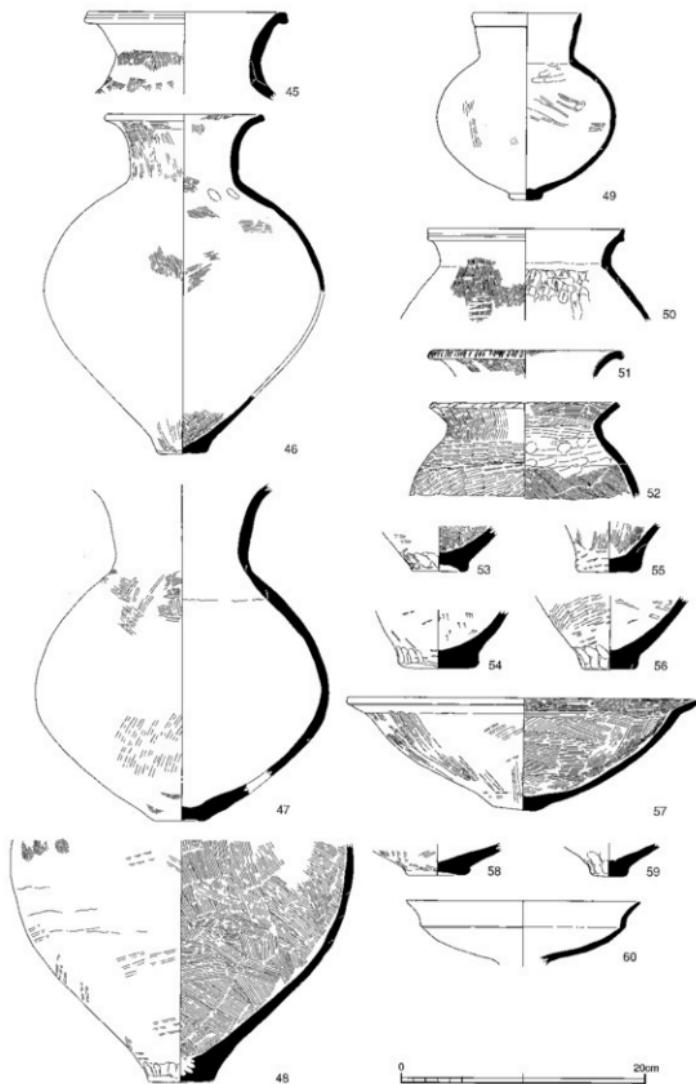
第12図 壁穴建物SH02

に位置している。土器群1に近い方は床面から浮いており、離れるにしたがって床面に近づいている。土器群1と土器群2はやや間隔があいているが、本来同一のものと考えられ、穹穴建物廃絶後の土器廃棄状況を示すものと考えられる。

土器群3は壁際の床面から出土した。土器115は柱穴P1内から出土した。磨石は柱穴P1西側の床面から出土した。

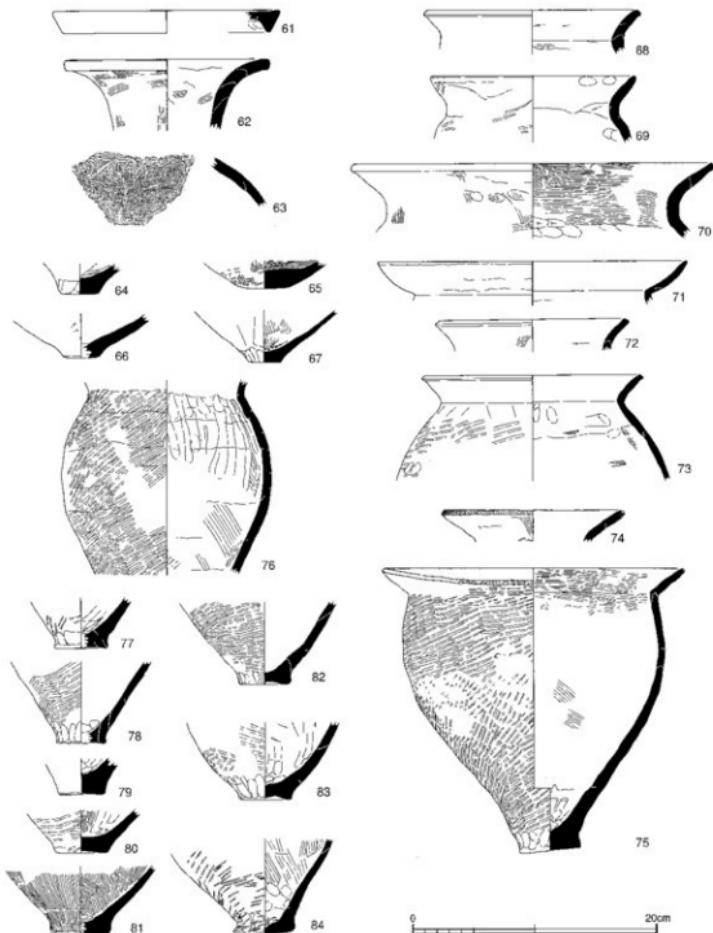


第13図 穹穴建物SH02遺物出土状況



第14図 積穴建物SH02土器群1出土遺物

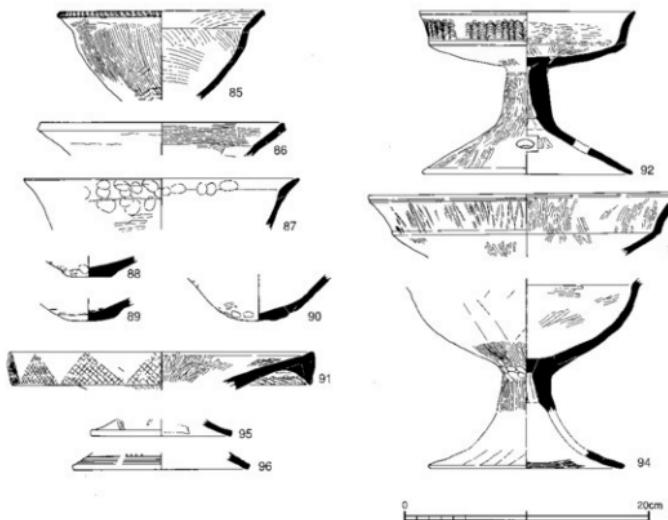
土器群1(45~60)からは、壺・甕・鉢・高坏が出土している。広口壺45は大きく外反する口頸部にわずかに垂下する口縁端部が付く。広口壺46は底部の内面にハケによるクモの巣状の回転調整を行っている。広口壺47は球形の体部に直立気味に外反する口頸部が付く。口縁端部は欠けている。体部はタタキ成形の痕跡を残している。壺48は体部下半のみで、タタキ成形を行っているが粘土帯接合痕が残る。内面はハケ調整で仕上げている。直口壺49は球形の体部に短く直立する口頸部が付く。底部は小さく作り出している。甕50は口縁部が屈曲し、口縁端部は拡張し、凹線文をめぐらす。体部はタタキ成形の後、強いハケ調整で仕上げている。甕51は口縁部の破片で、ハケ調整で仕上げ、口縁端部は刻み目風のタタキで仕上げている。



第15図 積穴建物SH02土器群2出土遺物1

壺52は外反する口縁部にハケ調整が残り、口縁端部は刻み目風のタタキで仕上げている。底部53・54はタタキ成形で、指頭圧調整を行っている。内面は53がハケ調整、54が縱方向のケズリである。底部55はタタキ成形の後、ハケ調整で仕上げている。底部56はタタキ成形で、指頭圧調整を行っている。鉢57は完形で口縁が屈曲しタタキ成形の後、ハケ調整で仕上げている。鉢58・59は底部である。高环60は有棱高环である。残りが悪く、器面調整は不明である。

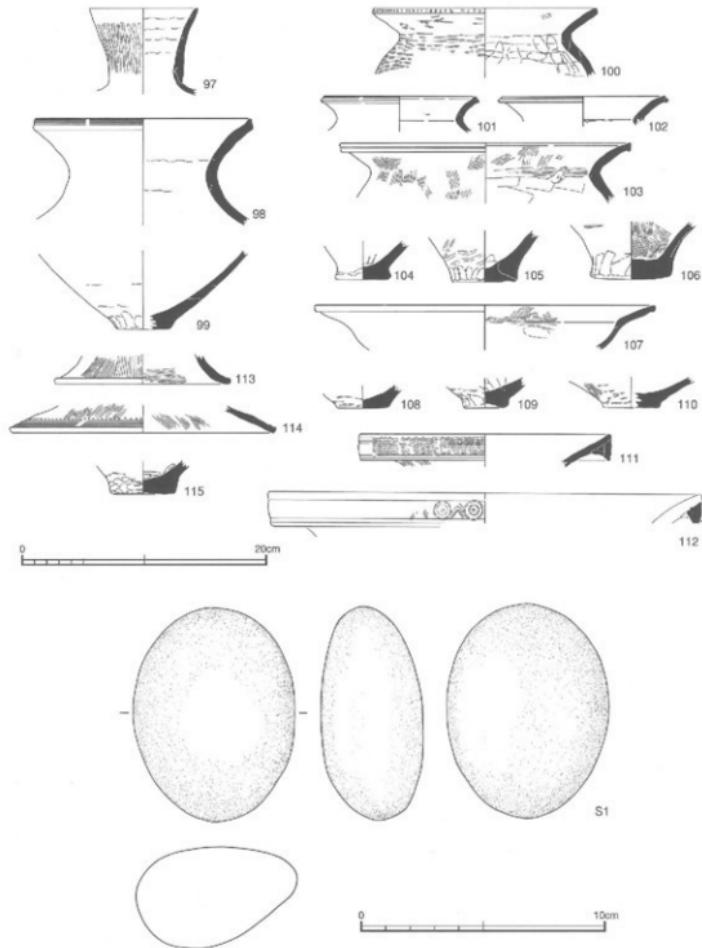
土器群2(61~96)からは壺・壺・鉢・器台・高环が出土している。広口壺61は垂下拡張する口縁部である。広口壺62は口頸部が大きく外反している。壺63は体部上半の破片でクシ描直線文を施し、部分的に波状文を施している。底部64は平底で精緻な作りである。底部65は丸底風に仕上げている。底部66・67は体部に向かって大きく開く。壺68・69は外反する口縁部で、器壁を厚く仕上げている。壺70は外反する口縁部をもつ大形の壺で、内外ともにハケ調整で仕上げている。壺71は内弯気味に外反する口縁部である。壺72・73は外反する口縁部の端部に面を作る。73は体部にタタキ成形を行っている。壺74は口縁部にハケ調整が残り、端部は刻み目風のタタキで仕上げている。壺75は器高の割に口径が大きく、鉢様の壺である。体部はタタキ成形を行い、口縁端部は刻み目風のタタキで仕上げている。底部は指頭圧調整を行っている。壺76は外反する口縁部が付く体部で、外面は右上がりのタタキ痕が残る。内外ともに粘土帯接合痕が明瞭に残る。底部77・78は体部がタタキ成形で、底部は指頭圧調整を行っている。底部79は厚い底部である。底部80・82・83は体部がタタキ成形で、上げ底の底部は指頭圧調整を行っている。底部81は内外ともにハケ調整で仕上げている。底部84は平底で指頭圧調整を行っている。鉢85は外反する口縁部の端部に刻み目風のタタキ痕を残す。体部はタタキ成形を行い、ハケ調整で仕上げている。鉢86・87は外反する口縁部の内面に稜をもつ。底部88は平底である。底部89は丸底気味である。底部90は丸底気味で指頭圧調整を行っている。器台91は垂下する口縁端部にヘラ描きの斜格子を充填した鋸歯文を施している。91は土器集中



第16図 穴室建物SH02土器群2出土遺物2

SX04と接合した。高坏92は有稜高坏で、口縁部外面に波状文をめぐらす。高坏93は有稜高坏で、口縁部外面に暗文状のヘラミガキを施す。高坏94は明確な稜なしに、口縁部を外反させる深い坏部をもつ。脚部との接合は粘土塊を充填する。高坏95・96は脚部で、96は円線文と刺突文をめぐらす。

土器群1・2からは壺・甕・鉢・器台が出土している。細頸長頸甕97は外面を縱方向のヘラミガキで仕上げ、内面は幅1.3cmの粘土帯接合痕が明瞭に残る。甕100は外反する口縁部の端部を刻み目風のタタキで仕



第17図 墓穴建物SH02出土遺物

上げている。体部外面は右上がりのタタキ痕が残る。内面には指頭調整痕のある粘土帯接合痕が明瞭に残る。壺101・102は外反する口縁部の端部に面を作る。底部104・105は指頭圧調整を行っている。鉢107は外反する口縁部の内面に稜をもつ。底部108は平底である。底部109は指頭圧調整を行っている。器台111は垂下する口縁端部にクシ彫波状文を施している。器台112は垂下する口縁端部にクシ彫波状文を施し、円形浮文を貼り付けている。脚113はハケ調整で仕上げている。脚114は裾に刺突文と凹線文をめぐらしている。

土器群3から出土した広口壺98は大きく外反する口頭部をもち、口縁端部に面を作り、擬凹線文を施している。焼土周辺から出土した底部106は指頭圧調整を行っている。

柱穴P1から出土した底部115は指頭圧調整を行っている。

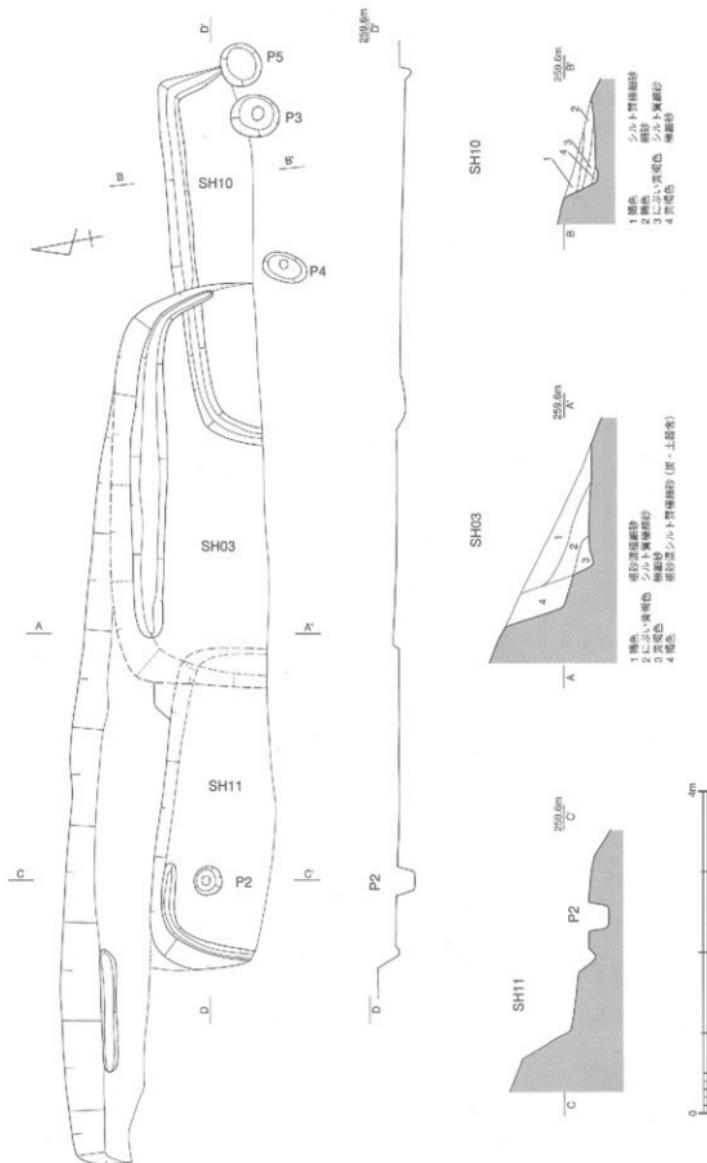
そのほか、広口壺99は底部を指頭圧調整している。壺103は外反する口縁部にハケ調整が残り、端部は拡張し、凹線文をめぐらす。底部110は平底である。

石器S1は楕円形を呈する磨石で、断面は扁平である。



第18図 積穴建物SH02出土土器拓影

第5節 積穴建物SH03



第19図 積穴建物SH03・SH11・SH10

## 第5節 壇穴建物SH03 (第19~21図・国版8・19~21)

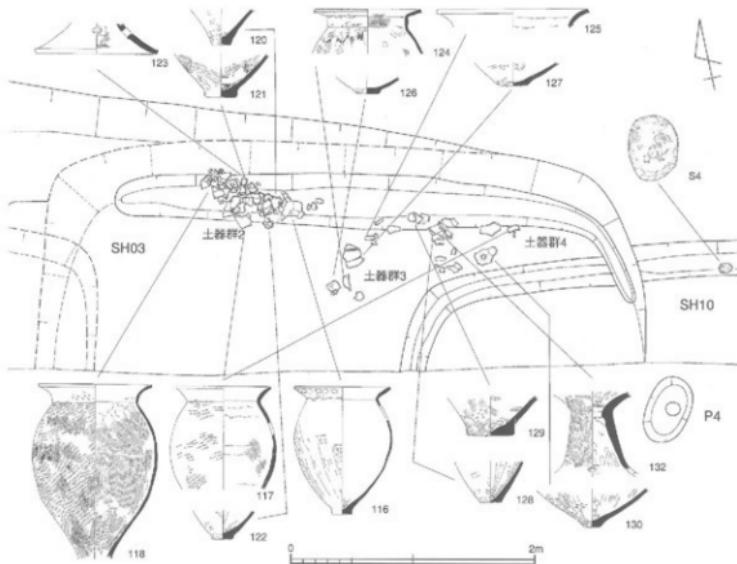
壇穴建物SH03・SH11・SH10は壇穴建物SH01の西側に位置している。SH03は傾斜地に立地しているため、南側の半分以上は残っていない。壇穴建物SH03は西側の一部を壇穴建物SH11が重複して切っている。当初、検出した時はSH11と同一と捉えていたが、床面の高さの違いや北壁の状況から別の建物と判断した。またSH03の西側でSH11の北側に位置する部分に幅1m程度の平坦面が存在しているが、性格など不明である。壇穴建物SH10は検出時にSH03に切られていることが判明した。壇穴建物SH03・SH11・SH10はともに、中央土坑や被熱赤変部分は確認できなかった。

壇穴建物SH03平面形は東西5.0m、南北2.0m以上の方方形である。床面の標高は259.3mを測る。北壁の高さは最大0.9mで、壁際には壁溝がめぐっている。幅30cm前後、深さ10cmである。柱穴は確認できなかった。

遺物は弥生土器（116～115）と石器（S2）が出土している。遺物の出土状況は大きく四群に分けられ、北壁際に位置し、床面に近い位置で出土している。西から土器群1・2・3・4と呼称した。

土器群1の土器は実測できなかった。

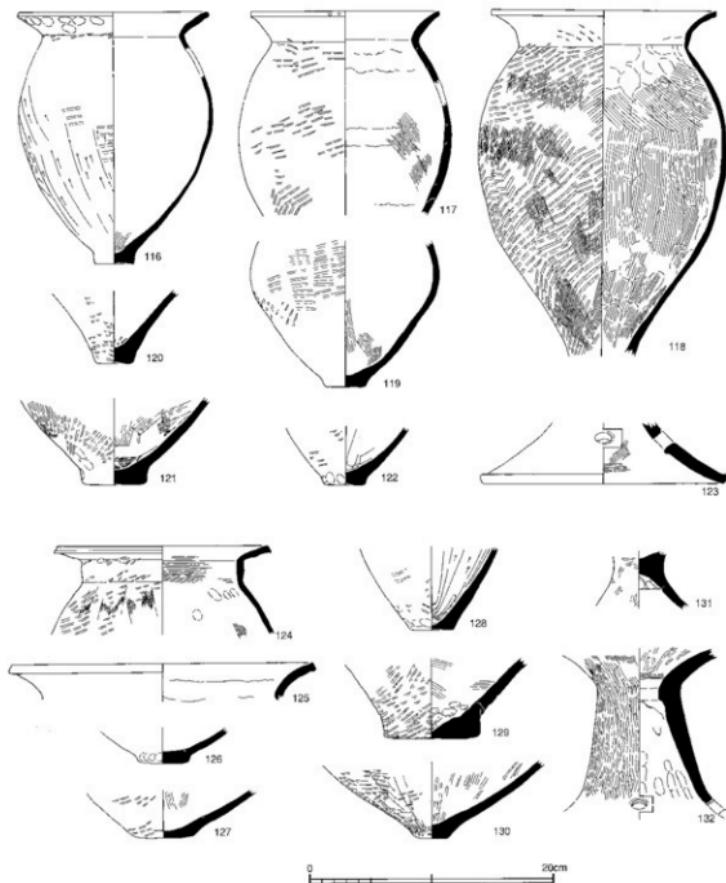
土器群2（116～123）からは、壺と器台が出土しており、壺がほとんどである。壺116は屈曲する口縁部をもち、体部はタキ成形を行い、縱方向のケズリを行っている。底部は張り出している。壺117は屈曲する口縁部をもち、体部はタキ成形を行い、内面には粘土帯成形痕が残る。117は土器群4と接合した。壺118は細身の体部に外反する口縁部が付き、端部に面をもつ。外面はタキ成形の後、ハケ調整を行っている。内面はハケ調整で仕上げているが、タキのための当て具様の円形痕跡が残っている。壺119は



第20図 壇穴建物SH03遺物出土状況

ややふくらんだ体部をタタキ成形する。底部120は直線的に延びる体部をタタキ成形している。底部121は安定した底部にタタキ成形する体部が付く。壺122はタタキ成形で、指頭圧調整を行っている。器台123は脚裾で、四方向に円形の邊かしをあける。

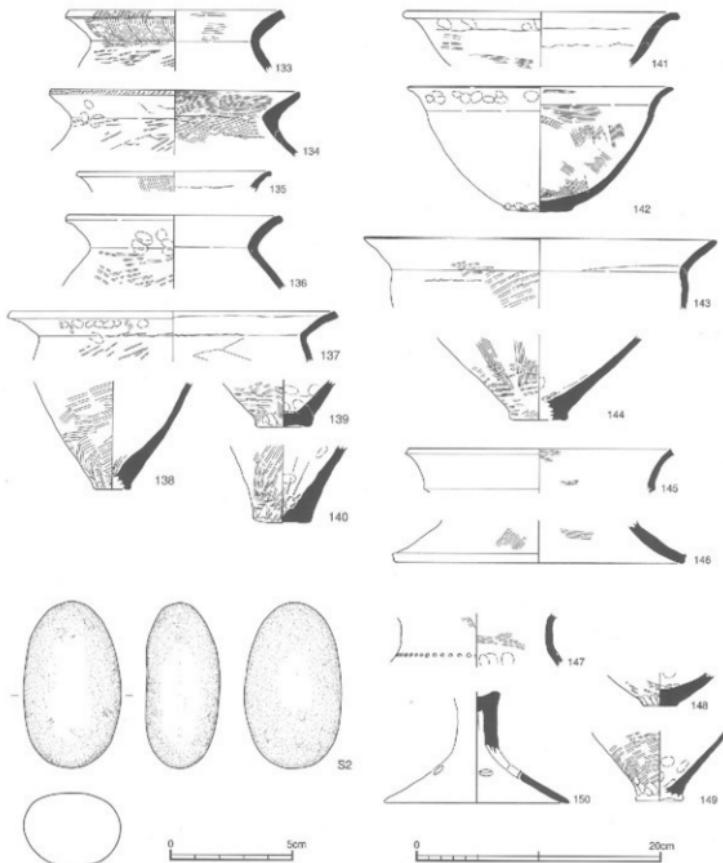
土器群3（124-127）からは、壺・鉢が出土している。壺124は体部から頸部が直立し、口縁部が屈曲している。タタキ成形の後ハケ調整を行っている。壺125は大形の壺で口縁内面に粘土帯成形痕が残る。鉢（126・127）は底部で、126は指頭圧調整を行っており、127は平底風の底部に体部はタタキ成形を行っている。



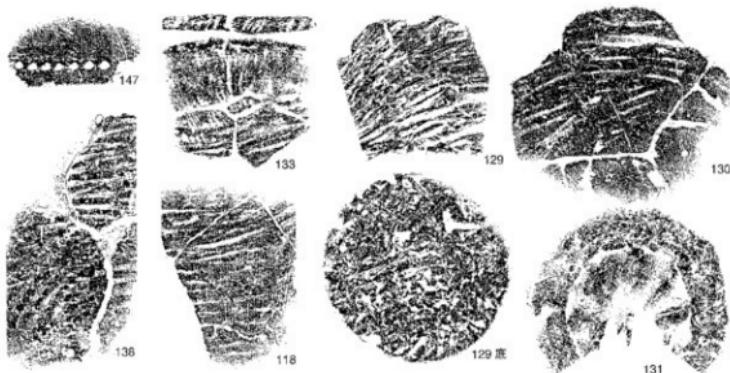
第21図 穫穴建物SH03土器群2・3・4出土遺物

土器群4（128～132）からは壺・壺・鉢・高坏・器台が出土している。壺底部128はタタキ成形を行い、内面はケズリを行っている。壺底部129はタタキ成形により底部を作り出している。鉢130は小さな底部に大きく広がる体部をもつ。外面は縦方向のケズリの後、タタキ成形を行っている。内面は縦方向のヘラミガキを行っている。高坏131は脚内面に指頭圧痕を残す粘土帯成形痕が残る。器台132は脚部から大きく屈曲する口縁部をもつ。脚部は四方向に円形の透かしをあける。外面は丁寧なヘラミガキで仕上げている。

そのほか弥生土器（133～150）が出土している。壺・鉢・高坏・器台・壺がある。壺133は外反する口縁部にはハケ調整が残り、口縁端部は刻み目風のタタキで仕上げている。体部外面は右上がりのタタキ痕が残る。壺134は外反する口縁部の端部に面を作り、刻み目風のタタキ痕を残している。内面はハケ調整



第22図 積穴建物SH03出土遺物



第23図 竪穴建物SH03出土土器拓影

で稜を作っており、粘土帯接合痕が残る。甌135は口縁端部を丸く仕上げている。外面はハケ調整である。甌136は外反する口縁部をもち、体部外面は右上がりのタタキ痕が残る。甌137は大形の甌で、屈曲する口縁部をもち、体部外面は右上がりのタタキ成形を行っている。内面の屈曲部の稜は明瞭である。甌底部(138~140・149)はタタキ成形で、指頭圧調整を行っており、上げ底である。140は直線的に開いている。鉢141は緩やかに外反する口縁部をもち、粘土帯接合痕が明瞭に残る。鉢142は大きめな底部に丸みをもった体部から緩やかに外反する口縁部をもつ。鉢143は屈曲する口縁部をもち、体部外面は右上がりのタタキ成形を行っている。底部144は体部外面を右上がりのタタキ成形を行い、ハケ調整で仕上げている。底部148は小さい底部に指頭圧調整を行っている。145は有後の高坏の口縁部もしくは二重口縁の壺の口縁部である。罐部には面をもつ。高坏150は脚部で、四孔をあけている。器面の残りが悪いため調整は不明である。器台146は脚据で罐部に面をもつ。広口壺147は頸体境に刺突文をめぐらしている。



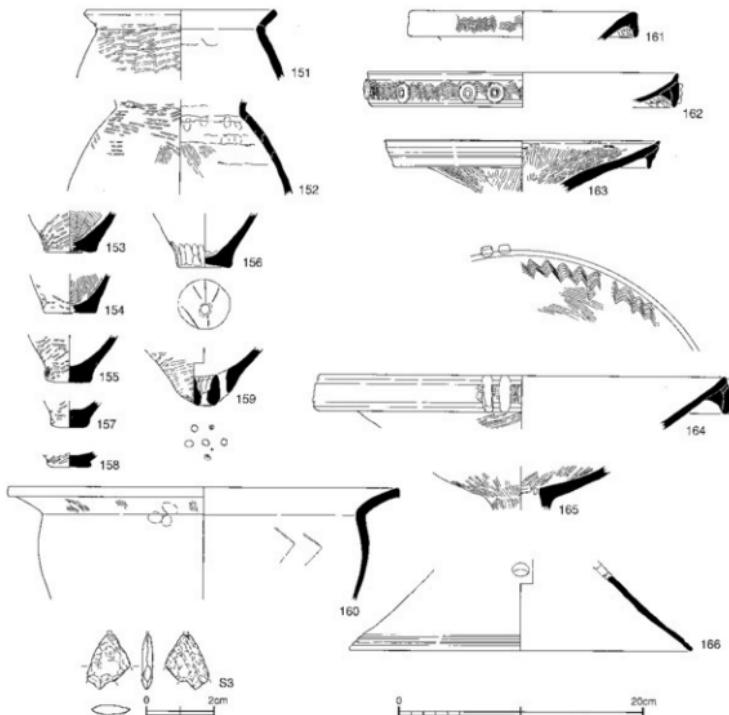
第24図 竪穴建物SH11出土土器拓影

## 第6節 竪穴建物SH11（第19・24・25図・図版8・22）

竪穴建物SH11はSH03に切られている。平面形が東西4.0m、南北1.5m以上の方形である。床面の標高は259.2mを測る。北壁の高さは最大60cmで、北東隅の一部の壁際には壁構がめぐっている。幅20cm、深さ10cmである。主柱穴は1本確認しており、P21は直径35cm、深さ28cmを測る。

遺物は弥生土器（151～166）と石器（S3）が出土している。弥生土器は甕・鉢・有孔鉢・広口壺・器台がある。甕151は短く屈曲する口縁をタタキ出している。甕152は体部内面に粘土帯接合痕跡が残る。甕底部153は内面にハケによるクモの巣状の回転調整を行っている。底部154・155はタタキ成形の痕跡が残る。底部156は木葉の圧痕が残る。鉢（157・158・160）は157・158が底部で、160は屈曲する口縁部をもつ鉢である。有孔鉢159は底部に六個の小孔をあけている。広口壺161は垂下する口縁端部に波状文を施している。器台162は垂下する口縁端部に波状文を施し、円形浮文を貼り付けている。器台163は垂下する口縁端部に凹線文を施す。器台164は垂下する口縁端部に波状文を施し、棒状浮文を貼り付けている。内面に波状文を施している。外面はタタキ成形の痕跡を残す。器台165は屈曲する接合部をもつ。脚部166は裾に凹線文を施している。

石器S3は凹基式で風化が進んでいる。縄文時代のものである。

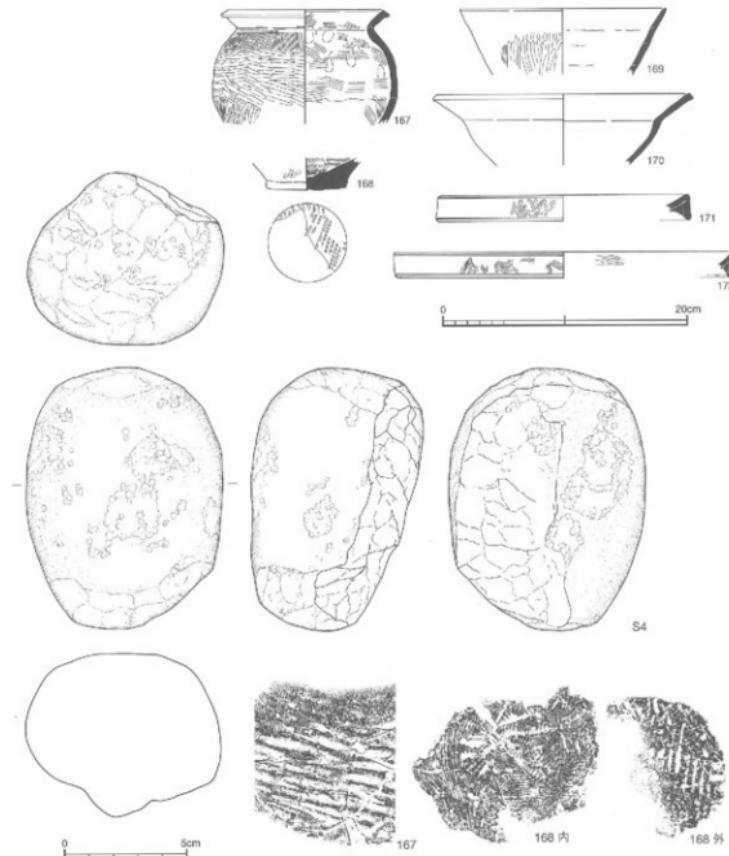


第25図 竪穴建物SH11出土遺物

## 第7節 壁穴建物SH10（第19・26・27図・図版9・13）

壁穴建物SH10はSH03に切られている。平面形が東西4.6m、南北1.1m以上の方形である。床面の標高は259.2mを測る。北壁の高さは最大0.4mで、壁際には塗溝がめぐっている。幅25cm、深さ10cmである。柱穴はP3が存在する。遺物は出土量が少なく、出土状況は床面に近い場所で出土した。北壁溝の中央部から凹石（S4）が出土した。

遺物は弥生土器（167～172）と石器（S4）が出土している。弥生土器は甕・鉢・器台がある。甕167は口縁部に面をもち、体部上半はタタキ成形の後、ハケ調整している。甕168は底部にタタキ痕跡が残る。鉢（169・170）は直口の口縁の169と屈曲する口縁の170とがある。器台（171・172）は口縁部に波状文を施している。凹石（S4）は6箇所の凹部と2箇所の敲打部がある。



第26図 壁穴建物SH10出土遺物

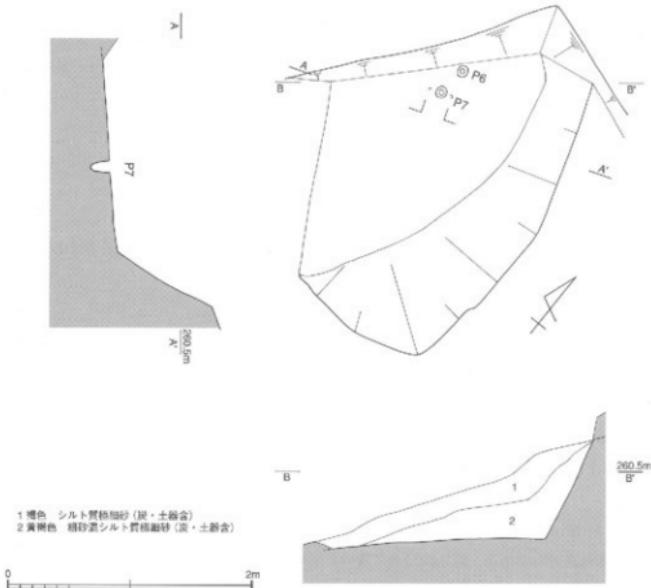
第27図 壁穴建物SH10出土土器拓影

## 第8節 壇穴建物SH07 (第28~30図・図版10・23)

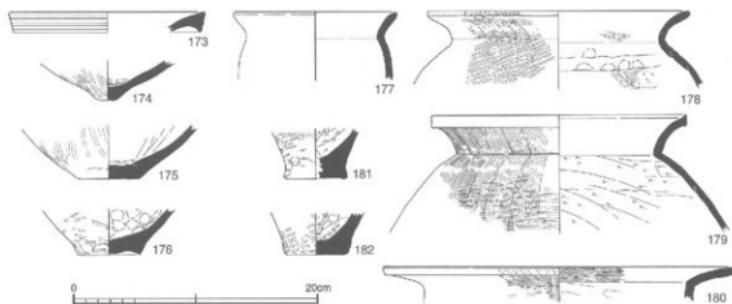
調査区の北東隅のA1・2区に位置している。ほかの壇穴建物が南向きの斜面に立地するのに対して、唯一西向き斜面に立地している。北西側は調査区外まで延びている。また斜面に立地しているため、南西側は削平されており、全貌は明らかでない。平面形は床面の状況から直径2.8mの円形の可能性が高い。床面はほぼ水平であり、標高は259.9m、東壁の高さ最大0.8mを測る。壁溝、中央土坑や被熱赤変部分は確認できなかった。柱穴は2本(P6・P7)を検出しているが、直径0.1m、深さ0.15mと小さいため、主柱穴になるか不明である。

遺物は、弥生土器(173~180)が出土している。ほかの壇穴建物と比べて少ない。

弥生土器は壺・甕がある。広口壺173は拡張した口縁端部に凹線文をめぐらしている。壺底部(174・175)は174が直口壺類、175が広口壺のものと考えられる。甕177は小形の甕である。甕178は外反する口縁部にはハケ調整が残り、端部は刻み目風のタタキで仕上げている。体部外面は右上がりのタタキ痕が残る。内面には指頭調整痕の幅1.7cmの粘土帯接合痕が明瞭に残る。甕179は屈曲する口縁部の端部に面を作る。体部外面は右上がりのタタキ成形の後、口縁部までハケ調整を行っている。内面は屈曲部までケズリを行っている。甕180は屈曲する口縁部の端部を刻み目風のタタキで仕上げている。甕底部181は外面を右上がりのタタキ成形の後、ハケ調整を行っている。内面はケズリを行っている。甕底部182は右上がりのタタキ成形を行っている。



第28図 壇穴建物SH07



第29図 壇穴建物SH07出土遺物



第30図 壇穴建物SH07出土土器拓影

## 第9節 土坑 (第31図・図版10)

土坑はA3区の南西向き斜面で4基（SK05・SK06・SK08・SK09）検出した。

### 土坑SK05

土坑SK05はA3区の南西向き斜面に立地しており、壇穴建物跡SH07の南東約2mに位置する。南北0.8m、東西1.3mの楕円形である。遺物は出土していない。

### 土坑SK06

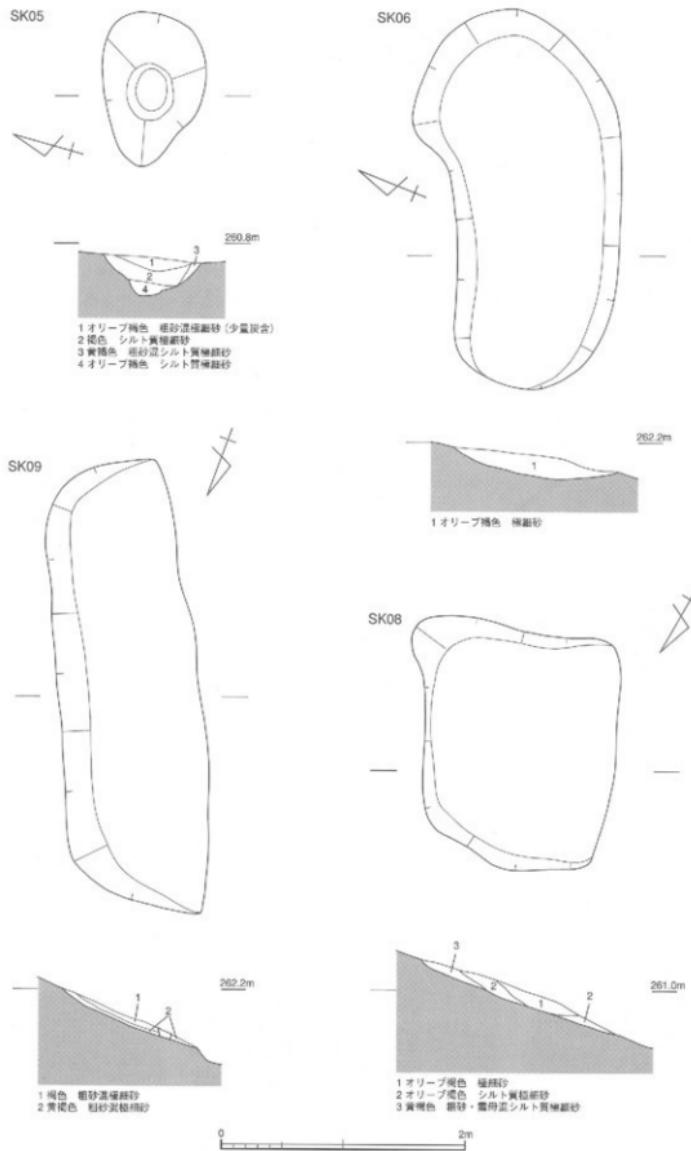
土坑SK06はA3区の南西向き斜面に立地しており、壇穴建物跡SH02の西約2mに位置する。南北3.1m、東西1.4mの長い楕円形である。遺物は出土していない。

### 土坑SK08

土坑SK08はA・B3区の南西向き斜面に立地しており、土坑SK05の南東に近接する。南北2.0m、東西1.6mの隅丸方形を呈する。遺物は出土していない。

### 土坑SK09

土坑SK09はA3区の南西向き斜面に立地しており、壇穴建物跡SH07の東上約3mに位置する。南北3.7m、東西1.2mの隅丸長方形である。深さは0.1mと浅い。平面形は壇穴建物の形態をしているため、壇穴建物として調査を進めていったが、底は傾斜しており、壁の立ち上がりおよび床面は検出できなかった。遺物は出土していない。



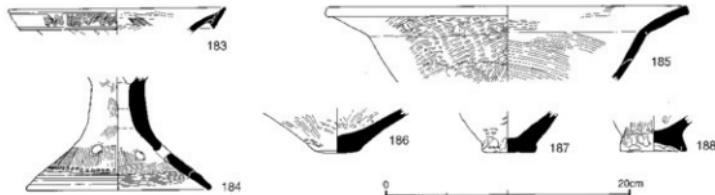
第31図 土坑

## 第10節 土器集中SX04および包含層 (第32~34図・図版9・23・24)

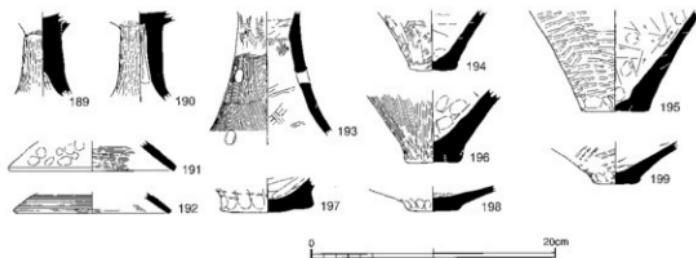
土器集中SX04はA3区に位置し、調査地点の最高所 (263.3m) に立地している。表土からの深さは20cmと浅く、遺構を想定して精査を重ねたが、周辺を含めて遺構は検出できなかった。

遺物は弥生土器 (183~188) の器台・壺・鉢がある。器台183は拡張した口縁端部に波状文を施している。器台184は脚裾に円線文と列点文を施している。壺186は底部である。鉢185は屈曲する口縁をタキ出し手法により作っている。体部はタキ痕の下に粘土帶のヒビが残る。鉢底部はタキのもの (187) とハケ調整のもの (188) がある。

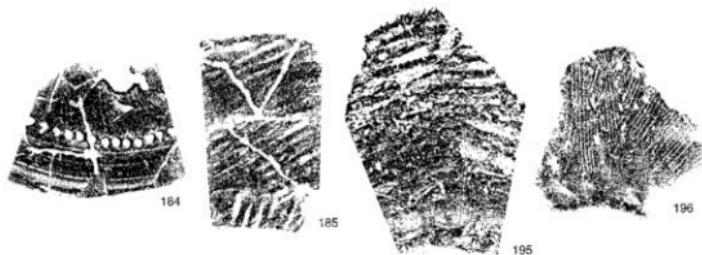
包含層あるいは遺構から遊離した主要な土器 (189~199) には、壺・鉢・器台・高坏がある。壺 (194~196) はハケ調整の壺195や内面を削っている壺196などがある。鉢 (197~199) は底部である。器台脚部 (193) は2段以上の透孔がある。高坏は脚上部 (189・190) と脚裾 (191・192) がある。



第32図 土器集中SX04出土遺物



第33図 包含層出土遺物



第34図 土器集中SX04・包含層出土土器拓影

## 第4章 久野々遺跡第7次調査 (第35・36回)

### 第1節 調査の概要

久野々遺跡は津名丘陵の中腹に位置する集落跡で、県営圃場整備事業をきっかけに存在が明らかとなつた。その後、圃場整備や農道整備、県道拡幅などに伴って、兵庫県教育委員会・北淡町教育委員会による発掘調査が行われている。弥生時代後期から中世に及ぶ数多くの遺構・遺物が検出され、現在の久野々集落とほば重なる範囲に展開が考えられている。

調査した箇所は、北東方向へ派生する小さな尾根状の地形を沿ってめぐる道路の側部である。調査箇所を挟んで西側は緩斜面、一方東側は比較的強い傾斜面が広がる。南西の水田では、平成元年に北淡町教育委員会（調査主任：津名郡町村会）によって県営圃場整備による確認調査が行われた。Na1地区と呼称された調査区で、弥生時代後期の円形竪穴建物が検出されている。ただし今回の事業地は、地形の変化する箇所にあたり、遺跡の範囲に該当するか不明確な点があった。

### 第2節 調査に至る経過と調査成果

#### 1. 調査に至る事前取扱い

県道仁井黒谷線は、津名丘陵の中腹を走る道路である。狭隘な部分が多いため、路面の拡幅を目的とする道路改良事業が暫時実施されている。

事業地のうち西側は、周知の埋蔵文化財包蔵地である久野々遺跡に接していることから、事業の実施に先立って、平成9年5月に確認調査を実施した。第2章で述べたとおり、北東部分で埋蔵文化財の存在が明らかとなつたが、道路沿いの法面をわずかに掘削する工事計画であり、安全上からも通常の発掘調査が難しい状況にあった。協議した結果、整形工事に伴って現地へ立ち入り、埋蔵文化財の状況を把握することになった。

#### 2. 調査の状況－遺構

調査は平成9年11月12日に実施した。法面整形に伴う掘削は、大半が水田の造成時に堆積した客土の除去で、本来の断面が露出した段階で掘削を終えていた。このため調査は遺構を立体的に掘削するのではなく、削りだされた法面の堆積状況を観察し、遺構・遺物等の状況を把握するにとどまった。

法面は南北方向の断面を形成し、北へ向けて傾斜をなす4層の堆積によって構成される。堆積の厚みに部分的な違いはあるものの、基本的には共通の層序であった。

堆積は現地表面から順に1：赤褐色ローム混じりシルト、2：黒褐色シルト、3：黄褐色ロームブロック混じりシルト、4：茶褐色シルトである。1層は水田造成に伴う盛り土で、2層との境界付近で局部的に旧耕作土・床土が遺存する。2層は遺物包含層、続く3・4層が無遺物の洪積層（地山）と考えられる。遺構と見られる土色変化が3層から切り込むことから、遺構面は3層の上面と判断できた。観察した限り遺構面は单一であった。

遺構と考えられる土色変化は、断面の南部に2箇所存在する。断面形状は方形で、ピットならびに土坑状の落ち込みと考えられる。掘削した範囲において、遺物は出土しなかった。

遺物包含層は、遺構面上の上層で帯状に堆積する。炭化物をまばらに含み、遺物量は多くないが、安定した状態にある。掘削では土器が少量出土したもの、いずれも細片化した状態で、形を判断できたものはなかった。

### 3. 調査の状況－遺物

確認調査で出土した石製品（S101）がある。なお本発掘調査では、対象を施工の及ぶ範囲にとどめたことから、細片化した土器が数点見られたに過ぎない。胎土の状況から弥生土器と考えられるものもあるが、全容がわかるものは存在しない。

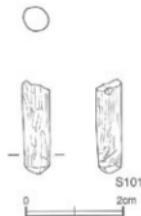
S101は石筆の残欠である。乳褐色の滑石を棒状に加工したもので、先端からわずかな部分が遺存する。全長1.9cm、遺存する端部は使用による擦りへりによって3面に平滑化している。断面は長径0.5mmで、わずかに梢円形をなす。

石筆は明治～昭和初期にかけて使われた筆記具の一種で、粘板岩などを板状に加工した「石板」とセットで用いる。黒板にチョークで文字を書くように筆記し、一般には明治の学校制導入とともに、紙の代用として使われた。一部の地方では小学校低学年の文字修練用具として、昭和の初めごろまで使用されていたという。また学校のみならず多様な状況で、チョークのかわりとして一時的な筆記に用いられた。出土した石筆は、開発等の際にもたらされたものであろう。

### 第3節まとめ

調査の結果、露出した法面のはば全面において、安定した基盤層と遺物包含層、基盤層に切り込んでいる遺構の存在を確認した。これらは圃場整備に伴って確認された南西部の遺構と一緒に広がりをなすものであろう。一方当地区より東側は遺構・遺物が限定的となることから、集落の縁辺部にあたると考えられる。

今回の調査では、断面の整形と精査にとどめたため、遺物の出土は少量であったが、良好な包含層ならびに遺構の残存を確認した。当該地の西側については遺構の存在が考えられる。



第35図 石筆

(参考文献) 伊藤宏幸「久野々遺跡第1次調査」「久野々遺跡」兵庫県文化財調査報告 第167号

兵庫県教育委員会 (1996)



第36図 調査区全景（左）と土層堆積状況

# 第5章 おぎわら遺跡出土土器の胎土分析

久作健二  
パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

これまで淡路地域では、土器胎土に関する岩石・鉱物学的な検討がほとんど行われてこなかった。そのため、今回の分析では、淡路地域における土器胎土の岩石・鉱物学的特徴を捉えることを目的として、おぎわら遺跡で出土した在地性の強い土器について胎土分析を行った。試料は、弥生時代後期後半の時期に帰属する。この時期には、揖津など県下の他地域でも製作技術から淡路系と考えられる土器が検出されている。今回の分析結果は、このような土器の動態を検討する際の基礎的なデータとなることも予想される。

考察では、試料の岩石・鉱物学的特徴と遺跡周辺の地質との関係を述べるとともに、辻・矢作ほか(2003)によって明らかにされた芦屋市市域において在地性の強いと判断された弥生時代後期後半の胎土分析結果との比較検討も行う。

## 第1節 試料

試料は、北淡町に所在するおぎわら遺跡より出土した弥生土器片4点である。各試料の報告番号、出土遺構、器種を一覧にして第2表に示す。

第2表 分析試料一覧

報告番号	出土地点	遺構	器種	時期
46	SH02	土器群1	壺	弥生時代後期後半
52	SH02	土器群1	壺	弥生時代後期後半
57	SH02	土器群1	鉢	弥生時代後期後半
60	SH02	土器群1	高杯	弥生時代後期後半

## 第2節 分析方法

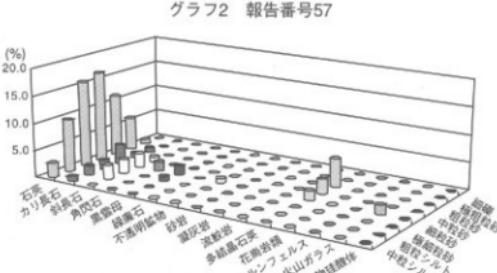
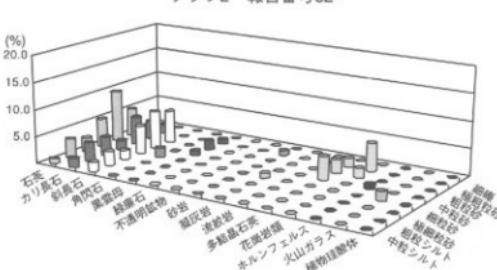
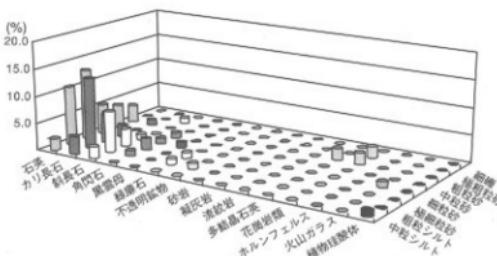
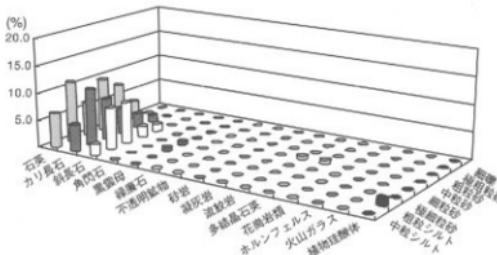
胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法がある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。弥生土器のように比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼成の土器の分析では、前者の方法の方が、胎土の特徴を捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類などを捉えることが可能であり、得られる情報は多い。したがって、ここでは薄片観察法による胎土分析を行う。データの呈示は、松田ほか(1999)が示した仕様に従う。以下に手順を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細繩～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

第3表 薄片観察結果

報告番号	砂粒区分	砂粒の種類構成												合計			
		鉱物片						岩石片									
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	黒雲母	綠康石	不透明鉱物	砂岩	凝灰岩	流紋岩	多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェルス	酸化鉄結核	粘土塊	火山ガラス
46	細礫																0
	極粗粒砂																0
	粗粒砂	5	2														7
	中粒砂	11	4	2							1	1					19
	細粒砂	14	7	3		1											25
	極細粒砂	9	11	11		1											32
	粗粒シルト	16	15	11												2	42
	中粒シルト	9	7	3													19
	基質																197
	孔隙																16
52	細礫																0
	極粗粒砂			1								2		1			4
	粗粒砂	3	1								2	2		2			10
	中粒砂	4			1												5
	細粒砂	5	2	1	1	1								1			11
	極細粒砂	12	5	3	2		1										23
	粗粒シルト	10	12	7	1		1	1									32
	中粒シルト	2	3	2											1		7
	基質																272
	孔隙																8
57	細礫																0
	極粗粒砂	1	2			1		1			2	6					13
	粗粒砂	6	4	7		2					3	2		1			25
	中粒砂	11	6	8		1				5	1						32
	細粒砂	6	2	6	2				1					2			19
	極細粒砂	3	4	2													9
	粗粒シルト	4	4	3													11
	中粒シルト	1	2	2													5
	基質																317
	孔隙																20
60	細礫																0
	極粗粒砂	1											1				2
	粗粒砂	7	1							6							14
	中粒砂	13	1	1						3							18
	細粒砂	19	4	3	2	2		1		2				2			35
	極細粒砂	18	2	3		1											24
	粗粒シルト	11	2	3													16
	中粒シルト	3	1														4
	基質																249
	孔隙																31



第37図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

### 第3節 結果

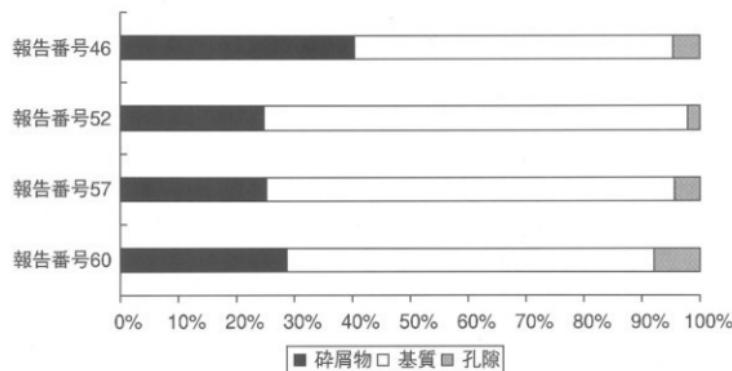
分析結果を第3表、第37～39図に示す。4点の試料は、ともに石英、カリ長石、斜長石の鉱物片を碎屑物の主体とするが、それに伴う鉱物片や岩石片の種類構成や砂粒の粒径組成などは、試料によって若干の違いが認められる。以下に各試料の特徴を述べる。

報告番号46（巖）：石英、カリ長石、斜長石の3者間の量比は、ほぼ同量程度である。これら3鉱物以外の碎屑物は、黒雲母の鉱物片と流紋岩および多結晶石英の岩石片、さらに植物珪酸体がそれぞれ、極めて微量認められるのみである。砂粒全体の割合は、今回の4点の試料の中では最も多い。粒径組成では、粗粒シルトにモードがあり、細粒側に片寄った分布を示すが、ピークは突出しておらず、淘汰度は低いといえる。

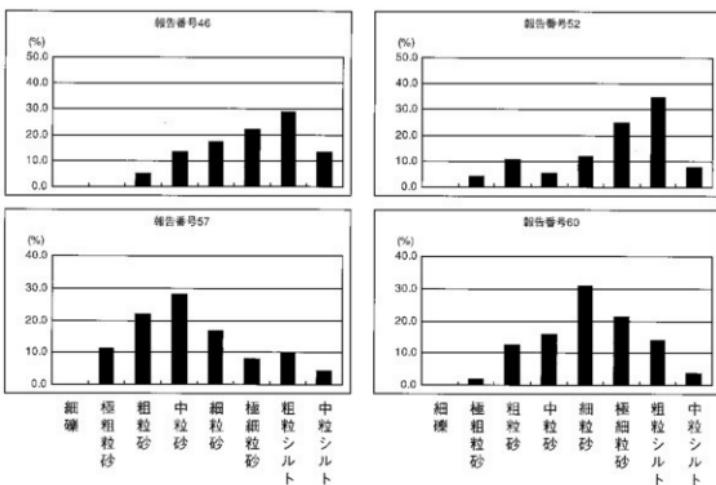
報告番号52（巖）：石英、カリ長石、斜長石の3者間の量比は、斜長石が他の2者に比べて若干少ない。これら3鉱物以外の碎屑物は、角閃石の鉱物片が微量ではあるが特徴的であり、他に極めて微量の黒雲母、緑レン石、不透明鉱物の鉱物片と微量の多結晶石英、花崗岩類の岩石片、さらに土器片に由来すると考えられる粘土塊などが認められる。砂粒全体の割合は、今回の4点の試料の中では最も少ない。粒径組成では、報告番号46と同様に粗粒シルトにモードがあり、細粒側に片寄った分布を示す。ただし、報告番号46に比べると、ピークがやや突出しており、淘汰度はやや高いといえる。

報告番号57（鉢）：石英、カリ長石、斜長石の3者間の量比は、ほぼ同量程度である。これら3鉱物以外の碎屑物では、少量の多結晶石英および花崗岩類の岩石片が特徴といえる。本試料の岩石片では、他にも砂岩と凝灰岩が極めて微量認められている。他に微量の角閃石と黒雲母の鉱物片、粘土塊、火山ガラスなどが極めて微量認められた。砂粒全体の割合は、報告番号52と同量程度であり、今回の4点の試料の中では比較的低い。粒径組成では、中粒砂にモードがあり、粗粒側にやや片寄った分布を示す。ピークはやや突出しており、淘汰度は上記の2試料に比べれば、やや高いといえる。

報告番号60（高坏）：石英、カリ長石、斜長石の3者間の量比は、石英が他の2者に比べて突出して多い。これら3鉱物以外の碎屑物は、少量の多結晶石英の岩石片が特徴となる。他には、微量の角閃石、黒雲母の鉱物片と火山ガラスなどが認められた。砂粒全体の割合は、今回の4点の試料の中では試料番号46に次



第38図 孔隙・砂粒・基質の割合



第39図 胎土の粒径組成

いで多い。粒径組成では、細粒砂にモードがあり、左右対称に近い分布を示す。また、ピークはやや突出しており、淘汰度は他の3試料に比べれば、高いといえる。

## 第4節 考察

### 1. 土器胎土から推定される地質について

おぎわら遺跡の位置する淡路島北部の地質については、水野ほか（1990）による報告がある。以下これに従って、その概要を述べる。淡路島北部の山地を構成する地質は、中生代白亜紀に形成された領家帯と呼ばれる地質を構成する花崗岩類である。この花崗岩類は、岩質の異なるいくつかの岩体に分類されているが、その中で最も広い分布を示す岩体は野島花崗閃緑岩と呼ばれる角閃石黒雲母花崗閃緑岩であり、おぎわら遺跡は、その分布域の南端部付近に位置する。野島花崗閃緑岩の南側には、志筑トーナル岩と呼ばれる角閃石黒雲母トーナル岩が比較的広く分布している。また、淡路島北部の山地内には、新第三紀中新世の砂岩・泥岩層を主体とする岩屋累層とよばれる地質が、断層沿いに点々と分布している。おぎわら遺跡の位置している久野々の盆地の南部には久野々断層がほぼ東西方向に伸びており、盆地には岩屋累層を構成する疊岩・砂岩・泥岩層が分布している。海岸沿いに発達する段丘は、新第三紀鮮新世から第四紀更新世にかけて堆積した砂・泥層である大阪層群により構成されている。

一方、津名町から洲本市付近までの淡路島中部地域の地質については、高橋ほか（1992）により報告されている。これに従えば、中部地域の山地を構成する地質は、北部と同様の領家帯の花崗岩類である。淡路島中部に分布する花崗岩類の主なものは、都志川花崗岩、洲本花崗閃緑岩、先山花崗岩などであり、これらの中、前2者は角閃石黒雲母花崗閃緑岩～花崗岩、先山花崗岩は黒雲母花崗岩とされている。また、山地周辺の丘陵地のほとんどは大阪層群により構成されている。

さらに、洲本市以南の淡路島南部地域は、北部と中部の主体であった領家帯の花崗岩は分布しておらず、

山地を構成する地質は、白亜紀後期に形成された堆積岩（漂砾、砂岩、泥岩）からなる（高橋ほか,1992）。

今回の試料の胎土中の鉱物片、岩石片の種類構成から推定される地質学的背景は、明らかに花崗岩の分布地域であり、特に、報告番号57に極めて微量認められた砂岩や凝灰岩の存在は、岩屋累層の分布も示唆している可能性がある。したがって、現時点では今回の土器の産地をおぎわら遺跡の位置する久野々の盆地内という限定はできないにせよ、淡路島北部地域内である可能性は高いと言える。なお、報告番号46に極めて微量認められた流紋岩については、その分布を淡路島内に求めるならば、淡路島中部の緑町北部の山地に分布する泉南流紋岩がある。この場合も、報告番号46の土器の産地を即示唆するものではないが、今後注目すべき碎屑物ではある。

## 2. 芦屋市内遺跡出土弥生土器との比較

辻ほか（2003）では、芦屋市内の沖積扇状地上に位置する寺田、打出岸造り、若宮の各遺跡より出土した弥生時代後期後半とされる甕について、今回とはほぼ同様の方法で胎土分析を行っている。その結果では、碎屑物の種類構成は、どの遺跡の試料も互いに類似するが、粒径組成において遺跡ごとの違いを見出している。ここで、各遺跡試料に共通する碎屑物の種類構成とは、石英、カリ長石、斜長石の鉱物片を主体とし、少量の花崗岩類の岩片と微量の角閃石または黒雲母の鉱物片およびチャートの岩石片を伴うというものである。これは、各遺跡の背後の山地の地質である六甲花崗岩など山陽帯に属する花崗岩の分布を反映していると考えた。また、チャートについては、六甲山地内にブロック状に分布する古生層である丹波層群に由来を求めた。

今回の試料も、胎土の碎屑物の種類構成から推定される地質学的背景は花崗岩を主とする地質であった。すなわち、上述の芦屋市内遺跡出土土器胎土の碎屑物種類構成と類似する点が多い。また、花崗岩類の岩石片についても、胎土中に含まれるようなサイズでは、岩質（例えば六甲花崗岩と野島花崗閃綠岩など）を識別することは難しい。しかし、今回の試料が、対岸の芦屋市や神戸市から搬入されたものである可能性は低いと考える。理由は、芦屋市内遺跡出土遺跡試料に共通して認められるチャートの岩片が、今回の試料からは全く認められないことによる。逆に今後、もし、淡路島内で胎土中にチャートを含む土器が検出された場合には、前述のように淡路島内にチャートの分布は認められないから、それは島外からの搬入品である可能性が非常に高いものと判断することができる。

今後も、淡路島内および大阪湾岸沿いの地域における分析例を蓄積することができれば、この地域における土器の動態を考える上で、非常に効果の高い資料の作成が可能になることと期待される。

## 引用文献

- 水野清秀・服部 仁・寒川 旭・高橋 浩,1990,明石地域の地質,地域地質研究報告（5万分の1図幅）,地質調査所,90p.
- 高橋 浩・寒川 旭・水野清秀・服部 仁,1992,洲本地域の地質,地域地質研究報告（5万分の1図幅）,地質調査所,107p.
- 辻 康男・矢作健二・辻本裕也・田中義文,2003,芦屋市内に所在する考古遺跡の自然科学分析,芦屋市文化財調査報告第47集平成12・13年度国庫補助事業寺田遺跡（第128地点）発掘調査報告書,135-163,芦屋市教育委員会.

## 第6章 まとめ

### 第1節 要約

おぎわら遺跡は淡路島の北部、津名郡北淡町久野々に位置している。標高260m前後の高地性集落である。今回のおぎわら遺跡第4次調査では、調査面積294m<sup>2</sup>の狭い範囲の調査を行った。標高は257.0m～263.5mに位置する南向き斜面で、弥生時代後期の遺構を検出し、弥生時代後期の遺物が出土した。遺構は竪穴建物6棟、土坑4基、土器集中1箇所を検出した。遺物には弥生土器と石器がある。弥生土器は壺・甕・鉢・高坏・器台・有孔鉢があり、石器は磨石・凹石がある。

### 第2節 おぎわら遺跡の遺物

#### 1. 土器廃棄について

竪穴建物SH01の土器群2とSH02の土器群1・2の土器は、竪穴建物の北東隅の部分に土層の堆積と同様に、傾斜をもって多量に出土した。これは竪穴建物廃絶後、一定期間が経ち竪穴建物が埋まりかけた段階で、廃棄された状況を表していると考えられる。したがってこれらの土器は直接的にはこの竪穴建物で使用されたものではないと考えられる。それと同時に、これらの竪穴建物の北東方向には竪穴建物SH01やSH02より新しい時期の建物が存在していた可能性が高い。

また、竪穴建物SH02の土器群2と土器集中SX04から出土した器台が接合しており、6m程度離れた場所での接合である。このことは、土器など廃棄する場合、複数の場所に廃棄していたと考えられ、土器が多量に出土する場所での非完形の多さを物語るものであろう。

#### 2. 弥生土器の器種組成および時期

今回おぎわら遺跡から出土した遺物は、すべて弥生時代後期のものであり、土器には壺・甕・鉢・高坏・器台がある。

図化した土器は199点であり、器種構成は壺26点(13.1%)、甕94点(47.2%)、鉢39点(19.6%)、高坏22点(11.1%)、器台17点(8.5%)、有孔鉢1点(0.5%)となっている。

遺構別にみると、竪穴建物SH01は全点数44点で、壺3点(6.8%)、甕24点(54.5%)、鉢8点(18.2%)、高坏8点(18.2%)、器台1点(2.2%)となっている。竪穴建物SH02は全点数71点で、壺17点(23.9%)、甕32点(45.1%)、鉢13点(18.3%)、高坏7点(9.9%)、器台2点(2.8%)となっている。竪穴建物SH03は全点数35点で、壺2点(5.7%)、甕19点(54.3%)、鉢8点(22.9%)、高坏3点(8.6%)、器台3点(8.6%)となっている。

竪穴建物SH11は全点数16点で、甕6点(37.5%)、鉢3点(18.8%)、器台6点(37.5%)となっている。竪穴建物SH10は全点数6点で、甕2点(33.3%)、鉢2点(33.3%)、器台2点(33.3%)となっている。竪穴建物SH07は全点数10点で、壺3点(30.0%)、甕7点(70.0%)となっている。土器集中SX04は全点数6点で、壺1点(16.7%)、甕1点(16.7%)、鉢2点(33.3%)、器台2点(33.3%)となっている。竪穴建物SH11・SH10・SH07、土器集中SX04は分母が少ないためばらつきが大きい。

おぎわら遺跡の弥生時代後期土器の器種組成を、時期が近い六甲山南麓の芦屋市寺田遺跡第128地点の溝4および溝2と比較してみる。溝4は総数99点で壺22.2%、甕41.42%、鉢19.19%、高坏16.16%、器台1.01%となっている。溝2は総数208点で壺15.38%、甕54.34%、鉢14.90%、高坏12.98%、器台2.40%となっている。

これらを比較すると、おぎわら遺跡は器台がわずかに多いが、比較的よく似た比率を示している。

次に北道路での位置づけを行う。津名郡東浦町禿山遺跡および尼ヶ岡遺跡から出土した土器により編年試案が組まれているため、比較を行いながら検討したい。甕は縫部に面をもつものが多く、外面はタキ成形の後、全体をハケ調整で仕上げるものも存在する。器台は垂下拡張した口縁端部の上下に退化した凹線を施し、クシ彫波状文を加飾するなど、禿山・尼ヶ岡Ⅰ期・Ⅱ期の特徴を示している。

揖津との比較は、高环や器台の脚据部への刺突・四線文による加飾がSH02やSX04で認められることから、森田編年VI-I様式に位置づけられる。

以上のように、器種組成の比率や禿山・尼ヶ岡遺跡の土器編年試案や揖津での編年により後期後半に位置づけられる。

### 3. おぎわら遺跡の弥生土器の特徴

今回、淡路島の弥生土器の胎上分析を始めて実施した。第5章第1節で述べられているとおり、おぎわら遺跡出土の土器には石英、カリ長石、斜長石の鉱物片の碎屑物が主体で、それに伴う鉱物片や岩石片の種類構成や砂粒の粒径組成などは、試料によって若干の違いが認められた。これらから推定される地質学的背景は、明らかに花崗岩の分布地域であり、報告番号57で微量認められた砂岩や凝灰岩の存在は、岩屋累層の分布も示唆している可能性があり、淡路島北部地域内である可能性は高いと言える。報告番号46で微量認められた流紋岩については淡路島中部の緑町北部の山地に分布する泉南流紋岩可能性も報告された。

このように、おぎわら遺跡周辺の地質構成も含めて、北淡路の土器に含まれる鉱物組成や粒土の特徴を明らかにしたことは意義があり、今後微量含有鉱物も注意する必要がある。また、六甲山南麓の芦屋市内の土器との比較を行い、両地域とも花崗岩地帯であるため、主体となる碎屑物の鉱物片はにかよっていた。ただ芦屋市内の土器には共通して認められるチャートの岩片が、おぎわら遺跡の試料からは全く認められないことから、淡路島内で胎土中にチャートを含む土器が検出された場合には、淡路島以外からの搬入の可能性の指標となる。

なお、固化していない土器片も含めて、肉眼観察では他地域からの搬入土器は出土していない。

## 第3節 おぎわら・久野々遺跡群の性格

### 1. おぎわら・久野々遺跡群の範囲

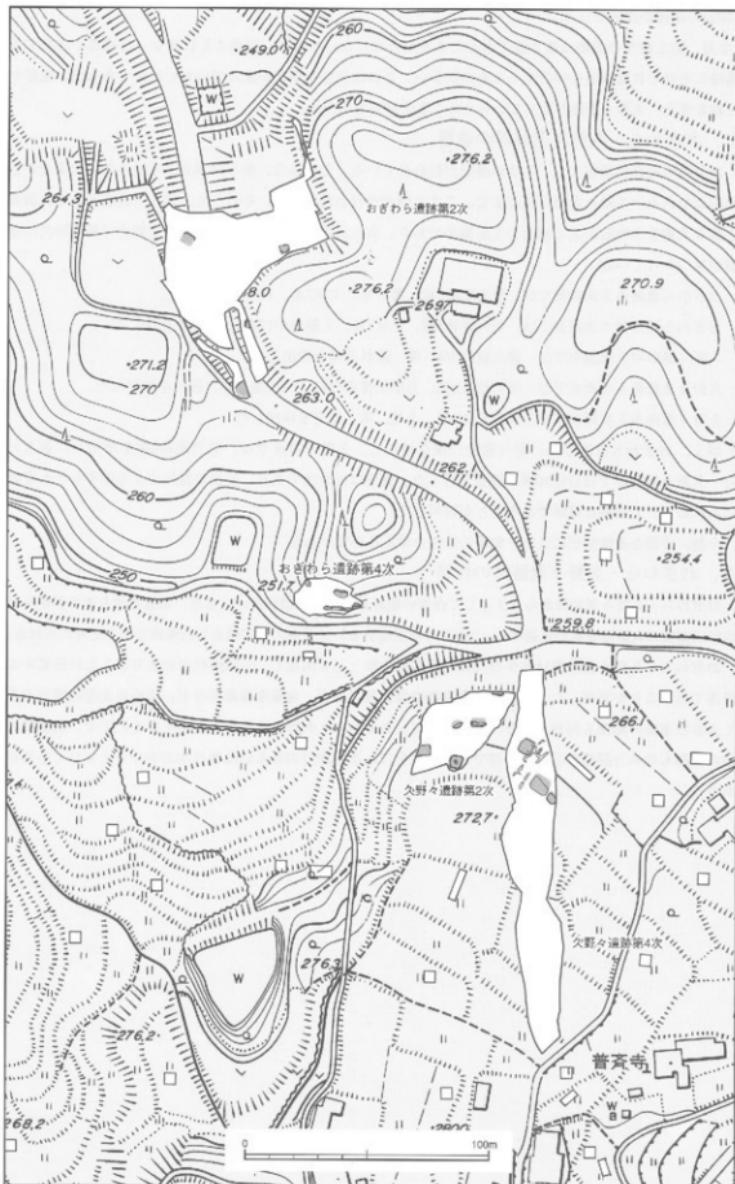
今回のおぎわら遺跡第4次調査では弥生時代後期の堅穴建物を6棟検出した。

おぎわら遺跡の南側に隣接する久野々遺跡は、弥生時代後期と中世・近世の遺跡である。弥生時代後期に限って内容を見ると、堅穴建物と方形周溝墓・溝・土坑が調査されている。おぎわら遺跡と久野々遺跡の遺構のもっとも近い距離は、池ノ川の谷を挟んで約60mと、目と鼻の先である。

おぎわら遺跡の遺構が見つかっている最北端はおぎわら遺跡第4次調査の北側200mのおぎわら遺跡第2次調査地点である。また久野々遺跡の弥生時代後期の遺構が見つかっている最南端は、おぎわら遺跡第4次調査の南側350mの久野々遺跡第5次調査地点である。また、第5図の地形図をみると北側にはさらに同様の地形が200mほど延びており、南側の地形変化点まで150mほどある。なお、調査地点により密度の差があり、また開田されている場所では削平されている可能性が高い。

おぎわら遺跡と久野々遺跡は南北に開析した池ノ川の谷を挟んで北側をおぎわら遺跡、南側を久野々遺跡と呼称していたが、弥生時代後期に限っていえば、おぎわら遺跡と久野々遺跡は同一の遺跡と考えた方が理解しやすい。

したがって、おぎわら・久野々遺跡群と呼ぶことにする。おぎわら・久野々遺跡群の範囲は、地形から判断して、常陸寺山北麓に広がる緩傾斜の標高約290m～約230mの高地に立地する南北約800m、東西約



第40図 おぎわら・久野々遺跡群

150mの範囲が推定できる。

なお、弥生時代の遺跡は第3図で示したような分布になっており、尾根ごとに異なった遺跡や近接する遺跡にそれぞれ遺跡名をつけているものが多い。これは充分な調査が進んでいないためであるが、地形や立地を考え、大きく遺跡群としてとらえることが必要であろう。

## 2. おぎわら・久野々遺跡群の遺構

おぎわら遺跡は今まで、4次の調査が行われている。そのうち、第2次調査と今回の第4次調査が全面調査である。久野々遺跡は今まで、7次の調査が行われている。そのうち、第2次調査と第4次調査と第5次調査が比較的広く掘った全面調査であり、第2次調査と第4次調査、第5次調査で弥生時代の遺構が見つかっている。

おぎわら遺跡第2次調査では、竪穴建物6棟、溝21条、土坑7基、柱穴を検出した。

おぎわら遺跡第4次調査では、竪穴建物6棟、土坑4基、土器集中1箇所、柱穴を検出した。

久野々遺跡第2次調査では、竪穴建物3棟、溝・段状遺構を検出した。

久野々遺跡第4次調査では、竪穴建物3棟、方形周溝墓4基、土坑8基、溝、柱穴を検出した。

久野々遺跡第5次調査では、竪穴建物2棟、土坑、溝、柱穴を検出した。

以上、おぎわら遺跡では、竪穴建物12棟を検出し、久野々遺跡では、竪穴建物8棟を検出し、おぎわら・久野々遺跡群では合計20棟の調査を行った。調査は部分的であり、斜面の開田による削平なども考慮に入れると、大規模な遺跡であることが判明した。

今後、詳細な遺物観察により、集落の動態を考える必要がある。

## 3. おぎわら・久野々遺跡群の性格

おぎわら・久野々遺跡群からは主として西側の播磨灘方面の眺望が良い。また、東浦の浦方面の谷からは六甲山南麓の大坂湧方面が見通せる。このような立地あるいは景観の上に成立した集落であると考えられる。

おぎわら・久野々遺跡群は弥生時代後期後半に突如として出現し、古墳時代の始まりとともに終焉する集落であることが判明した。これは舟木遺跡や塩垂西・塩垂・塩垂東遺跡群など、淡路島北部の眺望のきく大きな遺跡の動態も同様である。したがって、おぎわら・久野々遺跡群の性格を考えた上で、北淡路の他の遺跡も含めた詳細な分析が必要であるとともに、東部瀬戸内あるいは西日本の中で考えていく必要があろう。

第4表 遺物一覧(1)

No.	実測図	拓影	写真	種別	器種	部位	地区	出土遺構	出土場所	口径(cm)	跡高(cm)	底径(cm)	備考	
001 第9回	図版11			弥生土器	広口壺	口縁部	3B	SH01	土器群2	17.4	7.3+	-		
002 第9回				弥生土器	広口壺	頸部	3B	SH01	土器群2	-	5.6+	-		
003 第9回	図版11			弥生土器	壺	底部	3B	SH01	土器群2	-	4.0+	3.4		
004 第9回	図版13			弥生土器	鉢	口縁部	3B	SH01	土器群2	(20.0)	4.7+	-		
005 第9回	図版13			弥生土器	鉢	口縁部	3B	SH01	土器群2	(25.5)	5.2+	-		
006 第9回	図版13			弥生土器	鉢	口縁部	3B	SH01	土器群2	(26.5)	5.6+	-		
007 第9回	図版13			弥生土器	鉢	底部	3B	SH01	土器群2	-	18.0+	4.3		
008 第9回				弥生土器	鉢	底部	3B	SH01	土器群2	-	2.4+	4.0		
009 第9回	図版13			弥生土器	鉢	底部	3B	SH01	土器群2	-	2.7	4.0		
010 第9回	図版13			弥生土器	鉢	底部	3B	SH01	土器群2	-	2.6	4.1		
011 第9回	図版13			弥生土器	鉢	底部	3B	SH01	土器群2	-	4.3	6.0		
012 第9回	図版11			弥生土器	器台	口縁部	3B	SH01	土器群2	(21.0)	2.35+	-		
013 第9回	図版11			弥生土器	器台	底部	3B	SH01	土器群1	16.4	3.75+	-		
014 第9回	図版11			弥生土器	高环	脚部	3B	SH01	土器群2	(20.8)	16.0	(13.4)		
015 第9回	図版11			弥生土器	高环	脚部	3B	SH01	土器群2	-	5.6+	-		
016 第9回	図版11			弥生土器	高环	脚部	3B	SH01	土器群2	-	2.4+	(11.9)		
017 第9回	図版11			弥生土器	高环	脚部	3B	SH01	土器群2	-	3.2+	(11.4)		
018 第9回	図版11			弥生土器	高环	脚部	3B	SH01	土器群2	-	2.6+	(14.3)		
019 第9回	図版11			弥生土器	高环	脚部	3B	SH01	土器群2	-	3.4+	(16.4)		
020 第9回	図版11			弥生土器	高环	脚部	3B	SH01	土器群2	-	6.4+	(24.8)		
021 第11回				弥生土器	壺	口縁部	3B	SH01	土器群2	17.4	5.0+	-		
022 第11回				弥生土器	壺	口縁部	3B	SH01	土器群2	(13.4)	3.3+	-		
023 第11回				弥生土器	壺	口縁部	3B	SH01	土器群2	13.8	6.9+	-		
024 第11回				弥生土器	壺	口縁部	3B	SH01	土器群2	16.1	4.3+	-		
025 第11回				弥生土器	壺	口縁部	3B	SH01	(16.6)	3.5+	-			
026 第11回	図版12			弥生土器	壺	口縁部	3B	SH01	土器群2	15.0	6.9+	-		
027 第11回	図版12			弥生土器	壺	口縁部	3B	SH01	土器群2	(16.0)	11.5+	-		
028 第11回	図版12			弥生土器	壺	口縁部	3B	SH01	土器群2	(16.5)	13.6+	-		
029 第11回	図版12			弥生土器	壺	口縁部	3B	SH01	土器群2	(24.4)	2.8+	-		
030 第11回	図版12			弥生土器	壺	口縁部	3B	SH01	土器群2	(17.5)	7.8+	-		
031 第11回 第10回	図版12			弥生土器	壺	口縁部	3B	SH01	土器群2	(20.5)	8.1+	-		
032 第11回				弥生土器	壺	口縁部	3B	SH01	土器群2	(29.2)	3.9+	-		
033 第11回 第10回	図版12			弥生土器	壺	口縁部	3B	SH01	土器群2	(18.3)	20.1+	(4.5)		
034 第11回				弥生土器	壺	底部	3B	SH01	-	2.3+	3.8			
035 第11回	図版12			弥生土器	壺	底部	3B	SH01	土器群2	-	4.9+	4.1		
036 第11回	図版12			弥生土器	壺	底部	3B	SH01	土器群2	-	2.5+	3.8		
037 第11回	図版12			弥生土器	壺	底部	3B	SH01	土器群2	-	6.9+	(4.3)		
038 第11回	図版12			弥生土器	壺	底部	3B	SH01	-	8.1+	4.4			
039 第11回	図版12			弥生土器	壺	底部	3B	SH01	土器群2	-	3.4+	4.9		
040 第11回	図版12			弥生土器	壺	底部	3B	SH01	土器群2	-	3.1+	4.6		
041 第11回	図版12 第10回			弥生土器	壺	底部	3B	SH01	土器群2	-	3.3+	3.6		
042 第11回 第10回	図版12			弥生土器	壺	底部	3B	SH01	土器群2	-	4.9+	4.0		
043 第11回	図版12			弥生土器	壺	底部	3B	SH01	土器群2	-	4.5+	4.9		
044 第11回	図版12			弥生土器	壺	底部	3B	SH01	土器群2	-	4.5+	4.4		
045 第14回	図版14			弥生土器	広口壺	口縁部	3A	SH02	土器群1	15.2	6.7+	-		
046 第14回 第15回	図版14	図版15		弥生土器	広口壺	口縁部	3A	SH02	土器群1	12.6	(27.8)	4.3		
047 第14回				弥生土器	広口壺	口縁部	3A	SH02	土器群1	-	27.2+	4.6		
048 第14回	図版14			弥生土器	広口壺	底部	3A	SH02	土器群1	-	19.8+	(5.5)		
049 第14回	図版14			弥生土器	直口壺	口縁部	3A	SH02	土器群1	(8.8)	15.3	2.8		
050 第14回	図版14			弥生土器	直口壺	口縁部	3A	SH02	土器群1	(16.0)	7.5+	-		
051 第14回	図版14 第15回			弥生土器	直口壺	口縁部	3A	SH02	土器群1	15.2	2.3+	-		
052 第14回 第15回	図版14 第15回			弥生土器	直口壺	口縁部	3A	SH02	土器群1	(15.0)	7.9+	-		
053 第14回	図版14			弥生土器	直口壺	底部	3A	SH02	土器群1	-	3.7+	4.6		
054 第14回	図版14			弥生土器	直口壺	底部	3A	SH02	土器群1	-	4.8+	6.6		
055 第14回	図版14			弥生土器	直口壺	底部	3A	SH02	土器群1	-	4.1+	4.9		
056 第14回	図版14			弥生土器	直口壺	底部	3A	SH02	土器群1	-	6.1+	4.4		
057 第14回	図版14			弥生土器	鉢	底部	3A	SH02	土器群1	28.9	9.3	3.5		
058 第14回	図版14			弥生土器	鉢	底部	3A	SH02	土器群1	-	2.7+	5.4		
059 第14回	図版14			弥生土器	鉢	底部	3A	SH02	土器群1	-	2.8+	2.9		
060 第14回	図版14			弥生土器	鉢	底部	3A	SH02	土器群1	19.6	5.3+	-		
061 第15回	図版16			弥生土器	広口壺	口縁部	3B	SH02	土器群2	(18.0)	1.9+	-		
062 第15回	図版16			弥生土器	広口壺	口縁部	3B	SH02	土器群2	(16.9)	5.6+	-		
063 第15回	図版16			弥生土器	壺	口縁部	3B	SH02	土器群2	-	4.0+	-		
064 第15回	図版16			弥生土器	壺	底部	3B	SH02	土器群2	-	2.3+	3.3		
065 第15回	図版16			弥生土器	壺	底部	3B	SH02	土器群2	-	2.3+	4.6		
066 第15回	図版16			弥生土器	壺	底部	3B	SH02	土器群2	-	3.6+	3.0		
067 第15回	図版16			弥生土器	壺	底部	3B	SH02	土器群2	-	4.3+	2.7		
068 第15回	図版17			弥生土器	壺	口縁部	3B	SH02	土器群2	(17.1)	3.6+	-		
069 第15回	図版17			弥生土器	壺	口縁部	3B	SH02	土器群2	(16.6)	5.5+	-		
070 第15回	図版17			弥生土器	壺	口縁部	3B	SH02	土器群2	(29.3)	6.2+	-		

第4表 調査一覧(2)

No.	実測区	拓影	写真	種別	器種	部位	地区	出土遺構	出土場所	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考	
071	第15回	国版17	弥生土器	甕	口縁部	3B	SH02	土器群2	25.2	3.6+	-	-		
072	第15回	国版17	弥生土器	甕	口縁部	3B	SH02	土器群2	15.3	2.7+	-	-		
073	第15回	国版17	弥生土器	甕	口縁部	3B	SH02	土器群2	(17.7)	9.7+	-	-		
074	第15回	弥生土器	甕	口縁部	3B	SH02	土器群2	(14.5)	2.6+	-	-			
075	第15回	第18回	国版15	弥生土器	甕	3B	SH02	土器群2	(24.8)	23.3	5.1	-		
076	第15回	第18回	国版17	弥生土器	甕	底 部	3B	SH02	土器群2	-	16.0+	-		
077	第15回	国版17	弥生土器	甕	底 部	3B	SH02	土器群2	-	4.2+	4.4	-		
078	第15回	第18回	国版17	弥生土器	甕	底 部	3B	SH02	土器群2	-	6.7+	4.1	-	
079	第15回	国版17	弥生土器	甕	底 部	3B	SH02	土器群2	-	3.1+	3.8	-		
080	第15回	国版17	弥生土器	甕	底 部	3B	SH02	土器群2	-	3.6+	4.5	-		
081	第15回	国版17	弥生土器	甕	底 部	3B	SH02	土器群2	-	5.7+	4.5	-		
082	第15回	国版17	弥生土器	甕	底 部	3B	SH02	土器群2	-	6.8+	4.3	-		
083	第15回	第18回	国版17	弥生土器	甕	底 部	3B	SH02	土器群2	-	6.4+	4.3	-	
084	第15回	第18回	国版17	弥生土器	甕	底 部	3B	SH02	土器群2	-	7.8+	5.1	-	
085	第16回	第18回	国版16	弥生土器	鉢	口縁部	3B	SH02	土器群2	16.6	7.4+	-		
086	第16回	国版16	弥生土器	鉢	口縁部	3B	SH02	土器群2	(20.0)	2.5+	-	-		
087	第16回	国版16	弥生土器	鉢	口縁部	3B	SH02	土器群2	(22.4)	3.8+	-	-		
088	第16回	国版16	弥生土器	鉢	底 部	3B	SH02	土器群2	-	1.7+	3.7	-		
089	第16回	国版16	弥生土器	鉢	底 部	3B	SH02	土器群2	-	1.9+	3.8	-		
090	第16回	国版16	弥生土器	鉢	底 部	3B	SH02	土器群2	-	3.6+	4.8	-		
091	第16回	第18回	国版15	弥生土器	器合	口縁部	3A	SH02-SX04	土器群2	24.8	3.1+	-		
092	第16回	国版15	弥生土器	高环		3B	SH02	土器群2	17.6	13.5	(17.0)	-		
093	第16回	国版15	弥生土器	高环		3B	SH02	土器群2	25.9	5.2+	-	-		
094	第16回	国版16	弥生土器	高环		3B	SH02	土器群2	-	15.6+	(16.2)	-		
095	第16回	国版16	弥生土器	高环	側脚部	3B	SH02	土器群2	-	1.9+	(11.3)	-		
096	第16回	第18回	国版16	弥生土器	高环	側脚部	3B	SH02	土器群2	-	1.4+	(14.1)	-	
097	第17回	国版15	弥生土器	長頸甕		口縁部	3B	SH02	東壁甕	(5.7)	7.1+	-	-	
098	第17回	国版15	弥生土器	広口甕		口縁部	3A	SH02	土器群3	(17.6)	8.8+	-	-	
099	第17回	国版15	弥生土器	甕	底 部	3A	SH02	土器群2	-	6.5+	-	-		
100	第17回	第18回	国版18	弥生土器	甕	口縁部	3A	SH02	土器群	(16.3)	5.7+	-	-	
101	第17回	国版18	弥生土器	甕	口縁部	3A	SH02	土器群	(12.4)	2.9+	-	-		
102	第17回	国版18	弥生土器	甕	口縁部	3A	SH02	土器群	(13.2)	2.4+	-	-		
103	第17回	国版18	弥生土器	甕						23.8	5.0+	-		
104	第17回	国版18	弥生土器	甕	底 部	3B	SH02	土器群	-	3.2+	4.6	-		
105	第17回	国版18	弥生土器	甕	底 部	3A	SH02	土器群	-	4.2+	5.4	-		
106	第17回	国版18	弥生土器	甕	底 部	3B	SH02	燒土周辺	-	4.8+	6.6	-		
107	第17回	国版18	弥生土器	鉢	口縁部	3A	SH02	土器群	(27.8)	3.6+	-	-		
108	第17回	国版18	弥生土器	鉢	底 部	3B	SH02	土器群	-	1.9+	4.5	-		
109	第17回	国版18	弥生土器	鉢	底 部	3B	SH02	土器群	-	2.4+	3.7	-		
110	第17回	国版18	弥生土器	鉢	底 部	3B	SH02	土器群	-	2.3+	4.6	-		
111	第17回	第18回	国版18	弥生土器	甕	口縁部	3B	SH02	土器群	(20.4)	2.7+	-	-	
112	第17回	国版18	弥生土器	甕	口縁部	3B	SH02	土器群	(35.2)	2.2+	-	-		
113	第17回	国版18	弥生土器	鉢	脚部部	3A	SH02	土器群	-	2.3+	(14.0)	-		
114	第17回	第18回	国版18	弥生土器	器合	脚部部	3B	SH02	土器群	-	2.2+	(21.4)	-	
115	第17回	国版18	弥生土器	康	底 部	3B	SH02	P1	-	2.8+	5.3	-		
116	第21回	国版20	弥生土器	甕		3B	SH03	土器群2	(15.8)	20.8	3.2	-		
117	第21回	国版19	弥生土器	康		3B	SH03	土器群2+4	(15.4)	16.8	-	-		
118	第21回	国版19	弥生土器	甕		3B	SH03	土器群2	(18.3)	28.5+	-	-		
119	第21回	国版19	弥生土器	甕	底 部	3B	SH03	土器群2	-	12.0+	3.3	-		
120	第21回	国版19	弥生土器	甕	底 部	3B	SH03	土器群2	-	6.1+	3.2	-		
121	第21回	国版19	弥生土器	甕	底 部	3B	SH03	土器群2	-	7.2+	5.3	-		
122	第21回	国版19	弥生土器	甕	底 部	3B	SH03	土器群2	-	4.9+	3.5	-		
123	第21回	国版19	弥生土器	甕	底 部	3B	SH03	土器群2	-	5.5+	(19.6)	-		
124	第21回	国版20	弥生土器	甕	口縁部	3B	SH03	土器群3	17.1	7.3+	-	-		
125	第21回	国版20	弥生土器	甕	口縁部	3B	SH03	土器群3	(24.5)	3.9+	-	-		
126	第21回	国版20	弥生土器	鉢	底 部	3B	SH03	土器群3	-	3.0+	4.1	-		
127	第21回	国版20	弥生土器	鉢	底 部	3B	SH03	土器群3	-	3.9+	4.8	-		
128	第21回	国版19	弥生土器	康	底 部	3B	SH03	土器群4	-	6.6+	3.6	-		
129	第21回	第23回	国版19	弥生土器	甕	底 部	3B	SH03	土器群4	-	6.6+	7.9	-	
130	第21回	第23回	国版19	弥生土器	鉢	底 部	3B	SH03	土器群4	-	6.3+	3.6	-	
131	第21回	第23回	国版19	弥生土器	高环	脚 部	3B	SH03	土器群4	-	4.8+	-	-	
132	第21回	国版19	弥生土器	器合	脚 部	3B	SH03	土器群4	-	12.6+	-	-		
133	第22回	第23回	国版21	弥生土器	甕	口縁部	3B	SH03	土器群4	(17.2)	5.0+	-	-	
134	第22回	国版21	弥生土器	甕	口縁部	3B	SH03	土器群4	20.4	5.3+	-	-		
135	第22回	国版21	弥生土器	甕	口縁部	3B	SH03	土器群4	(15.6)	1.7+	-	-		
136	第22回	国版21	弥生土器	甕	口縁部	3B	SH03	土器群4	(17.2)	6.1+	-	-		
137	第22回	国版21	弥生土器	甕	口縁部	3B	SH03	土器群4	(26.5)	4.2+	-	-		
138	第22回	第23回	国版21	弥生土器	甕	底 部	3B	SH03	-	8.9+	3.0	-		
139	第22回	国版21	弥生土器	甕	底 部	3B	SH03	-	3.9+	4.5	-	-		
140	第22回	国版21	弥生土器	甕	底 部	3B	SH03	-	6.4+	4.8	-	-		

第4表 遺物一覧 (3)

No.	実測図	拓形	写真	種別	器種	部位	地区	出土遺構	出土場所	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
141	第22回	図版21	弥生土器	鉢	口縁部	SB	SH03		(22.0)	4.5+	-		
142	第22回	図版21	弥生土器	鉢	SB	SH03			(21.1)	10.3	5.6		
143	第22回	図版21	弥生土器	鉢	口縁部	SB	SH03		(26.5)	5.8+	-		
144	第22回	図版21	弥生土器	鉢	底部	SB	SH03		-	7.0+	4.8		
145	第22回	図版21	弥生土器	高杯	口縁部	SB	SH03	土器群下層	(21.5)	3.7+	-		
146	第22回	図版21	弥生土器	器台	口縁部	SB	SH03		(23.2)	3.6+	-		
147	第22回 第23回	図版20	弥生土器	口縁部	頭部	SB	SH03	トレンチ	-	4.4+	-		
148	第22回	図版20	弥生土器	鉢	底部	SB	SH03	縫内	-	2.8+	2.8		
149	第22回	図版20	弥生土器	器	底部	SB	SH03	トレンチ	-	5.5+	3.6		
150	第22回	図版20	弥生土器	高杯	脚部	SB	SH03	トレンチ	-	9.2+	15.2		
151	第24回	図版22	弥生土器	器	口縁部	SB	SH11		(15.3)	5.8+	-		
152	第24回	図版22	弥生土器	器	全体	SB	SH11		-	7.8+	-		
153	第24回	図版22	弥生土器	器	底部	SB	SH11		-	3.4+	4.5		
154	第24回	図版22	弥生土器	器	底部	SB	SH11		-	3.3+	4.3		
155	第24回	図版22	弥生土器	器	底部	SB	SH11		-	3.9+	3.6		
156	第24回 第25回	図版22	弥生土器	器	底部	SB	SH11		-	4.5+	4.5		
157	第24回	図版22	弥生土器	鉢	底部	SB	SH11		-	2.2+	3.1		
158	第24回	図版22	弥生土器	鉢	底部	SB	SH11		-	1.2+	3.6		
159	第24回	図版22	弥生土器	有孔鉢	底部	SB	SH11		-	4.8+	1.4		
160	第24回	図版22	弥生土器	鉢	口縁部	SB	SH11		(31.9)	9.3+	-		
161	第24回	図版22	弥生土器	器台	口縁部	SB	SH11		(18.1)	2.4+	-		
162	第24回 第25回	図版22	弥生土器	器台	口縁部	SB	SH11		(25.3)	2.9+	-		
163	第24回 第25回	図版22	弥生土器	器台	口縁部	SB	SH11		(22.5)	4.2+	-		
164	第24回 第25回	図版22	弥生土器	器台	口縁部	SB	SH11		(33.6)	4.6+	-		
165	第24回	図版22	弥生土器	器台	口縁部	SB	SH11		-	3.7+	-		
166	第24回	図版22	弥生土器	器台	脚部	SB	SH11		-	7.3+	(27.9)		
167	第26回 第27回	図版13	弥生土器	器	SB	SH10	周壁溝	(12.8)	9.3+	-			
168	第26回 第27回	図版13	弥生土器	器	底部	SB	SH10	柱窓	-	2.6+	6.5		
169	第26回	図版13	弥生土器	鉢	口縁部	SB	SH10	周壁溝・床面	(16.8)	5.4+	-		
170	第26回	図版13	弥生土器	鉢	口縁部	SB	SH10	周壁溝	(20.8)	5.9+	-		
171	第26回	図版13	弥生土器	器台	口縁部	SB	SH10		(20.0)	2.1+	-		
172	第26回	図版13	弥生土器	器台	口縁部	SB	SH10		(27.7)	2.5+	-		
173	第29回	図版23	弥生土器	器	口縁部	1-2B	SH07		(15.9)	2.2+	-		
174	第29回	図版23	弥生土器	器	底部	1-2B	SH07		-	3.3+	1.7		
175	第29回	図版23	弥生土器	器	底部	1-2B	SH07		-	4.5+	5.0		
176	第29回	図版23	弥生土器	器	底部	1-2B	SH07		-	3.8+	5.0		
177	第29回	図版23	弥生土器	器	口縁部	1-2B	SH07		(13.2)	5.6+	-		
178	第29回 第30回	図版23	弥生土器	器	口縁部	1-2B	SH07		(21.2)	6.5+	-		
179	第29回 第30回	図版23	弥生土器	器	口縁部	1-2B	SH07		20.9	9.2+	-		
180	第29回	図版23	弥生土器	器	口縁部	1-2B	SH07		(28.8)	2.9+	-		
181	第29回	図版23	弥生土器	器	底部	1-2B	SH07		-	4.1+	(5.2)		
182	第29回	図版23	弥生土器	器	底部	1-2B	SH07		-	3.4+	5.3		
183	第32回	図版23	弥生土器	器台	口縁部	3A	SX04		(17.7)	2.2+	-		
184	第32回 第34回	図版23	弥生土器	器台	製造部	3A	SX04		-	6.3+	(15.1)		
185	第32回 第34回	図版23	弥生土器	鉢	口縁部	3A	SX04		(29.4)	6.1+	-		
186	第32回	図版23	弥生土器	器	底部	3A	SX04		-	3.7+	3.6		
187	第32回	図版23	弥生土器	器	底部	3A	SX04		-	3.4+	4.3		
188	第32回	図版23	弥生土器	鉢	底部	3A	SX04		-	2.9+	5.4		
189	第33回	図版24	弥生土器	高杯	脚部柱	1-2A	包含層		-	6.8+	-		
190	第33回	図版24	弥生土器	高杯	脚部柱	3B	包含層		-	7.4+	-		
191	第33回	図版24	弥生土器	高杯	脚部柱	3B	包含層		-	2.5+	(13.4)		
192	第33回	図版24	弥生土器	高杯	脚部柱	3B	包含層		-	1.7+	(12.6)		
193	第33回	図版24	弥生土器	器台	脚部	3B	包含層		-	10.2+	-		
194	第33回	図版24	弥生土器	器	底部	3B	包含層		-	4.9+	3.8		
195	第33回 第34回	図版24	弥生土器	器	底部	3B	包含層		-	8.3+	5.5		
196	第33回 第34回	図版24	弥生土器	器	底部	3B	包含層		-	6.0+	4.7		
197	第33回	図版24	弥生土器	鉢	底部	3B	包含層		-	2.8+	7.6		
198	第33回	図版24	弥生土器	鉢	底部	3B	包含層		-	2.1+	4.3		
199	第33回	図版24	弥生土器	鉢	底部	3B	包含層		-	3.5+	3.7		
No.	実測図	写真	種別	器種	地区	出土遺構	出土場所	全長(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考		
S1	第17回	図版25	石	器	磨石	SB	SH02	床面	8.6	6.7	399.9		
S2	第22回	図版25	石	器	磨石	SB	SH03		6.9	4.0	133.3		
S3	第24回	図版25	石	器	石鏃	2B	SH11		1.67+	1.31+	0.73		
S4	第26回	図版25	石	器	凹石	3B	SH10	北壁溝	10.7	8.1	918.5		
S101	第35回	図版25	石	製品	石筆				1.93+	5.60	0.98	火器小刀	

## 参考文献

- 水野清秀・服部仁・寒川旭・高橋浩『明石地域の地質』　通商産業省工業技術院地質調査所1992年  
水野清秀・服部仁・寒川旭・高橋浩『洲本地域の地質』　通商産業省工業技術院地質調査所1994年  
岡本稔『淡路島の遺跡概観』『古代文化』第23巻 第5・6号 財團法人古代学協会1971年  
森田克行『揖津地域』『弥生土器の様式と編年 近畿Ⅱ』木耳社1990年  
竹内理三編　『角川日本地名大辞典28兵庫県』角川書店1988年  
樋本誠一・松下勝『日本の古代遺跡3 兵庫南部』保育社1984年  
兵庫県教育委員会『製塙遺跡I（津名郡）』兵庫県生産遺跡調査報告第2冊 1993年  
兵庫県教育委員会『中原遺跡他発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第159冊 1997年  
兵庫県教育委員会『塩臺西遺跡』兵庫県文化財調査報告第160冊 1997年  
兵庫県教育委員会『久野々遺跡』兵庫県文化財調査報告第167冊 1997年  
兵庫県教育委員会『佃遺跡』兵庫県文化財調査報告第176冊 1998年  
兵庫県教育委員会『禿山遺跡他発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第177冊 1998年  
兵庫県教育委員会『まるやま遺跡』兵庫県文化財調査報告第178冊 1998年  
兵庫県教育委員会『貴船神社遺跡』兵庫県文化財調査報告第219冊 2001年  
兵庫県教育委員会『まるやま遺跡II』兵庫県文化財調査報告第230冊 2002年  
兵庫県教育委員会『塩臺遺跡』兵庫県文化財調査報告第231冊 2002年  
津名郡町村会『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報I』 1999年  
津名郡町村会『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報II』 2000年  
津名郡町村会『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報III』 2001年  
津名郡町村会『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報IV』 2002年  
北淡町教育委員会『舟木遺跡』1994年  
北淡町教育委員会『富島遺跡』1998年  
東浦町教育委員会『楠本下林遺跡』東浦町埋蔵文化財調査報告書第1集 1997年  
東浦町教育委員会『引野遺跡発掘調査概要』東浦町埋蔵文化財調査報告書第2集 1999年  
東浦町教育委員会『大坂遺跡 千本遺跡 行免形遺跡』東浦町埋蔵文化財調査報告書第3集 2003年  
芦屋市教育委員会『寺田遺跡（第128地点）発掘調査報告書』芦屋市文化財調査報告第47集 2003年

# 図 版



調査地点遠景（南東から）



道路完成後遠景（南から）



南斜面竪穴建物群（南西から）



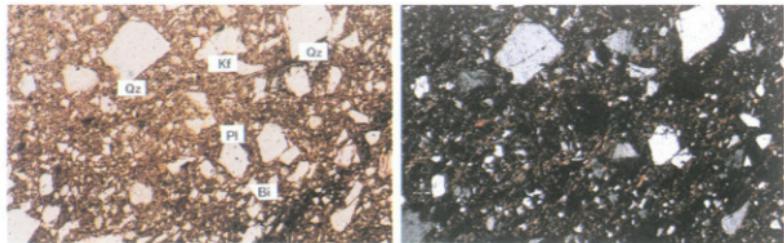
竪穴建物SH01（西から）



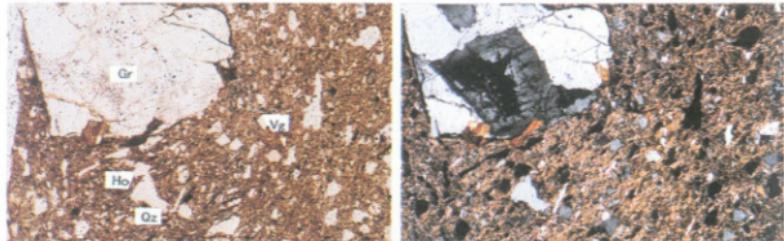
竪穴建物SH02（南西から）



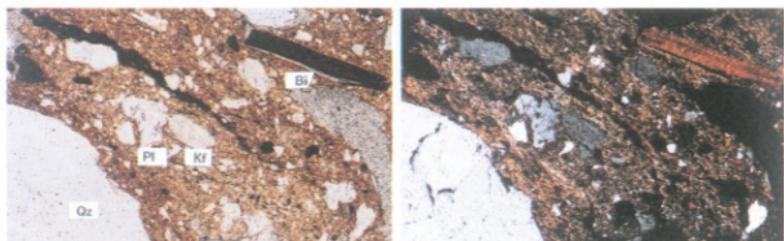
竪穴建物SH02出土土器



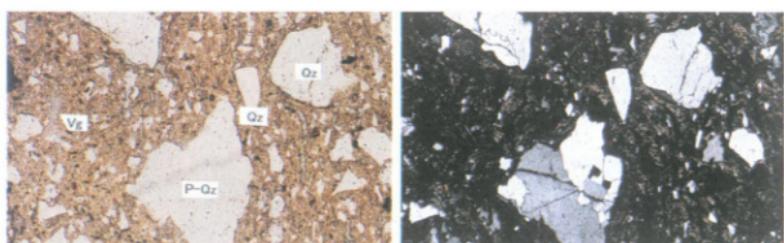
1. 報告番号46 SH02 土器群1 壺



2. 報告番号52 SH02 土器群1 罐



3. 報告番号57 SH02 土器群1 鉢



4. 報告番号60 SH02 土器群1 高壺

Qz: 石英, Kf: カリ長石, Pl: 斜長石, Ho: 角閃石, Bi: 黒雲母, P-Qz: 多結晶石英,  
Gr: 花崗岩, Vg: 火山ガラス。

写真左列は下方ポーラー、写真右列は偏光ポーラー下。

0.5mm



調査前全景（南から）



調査地点全景（南東から）



竪穴建物SH01（西から）



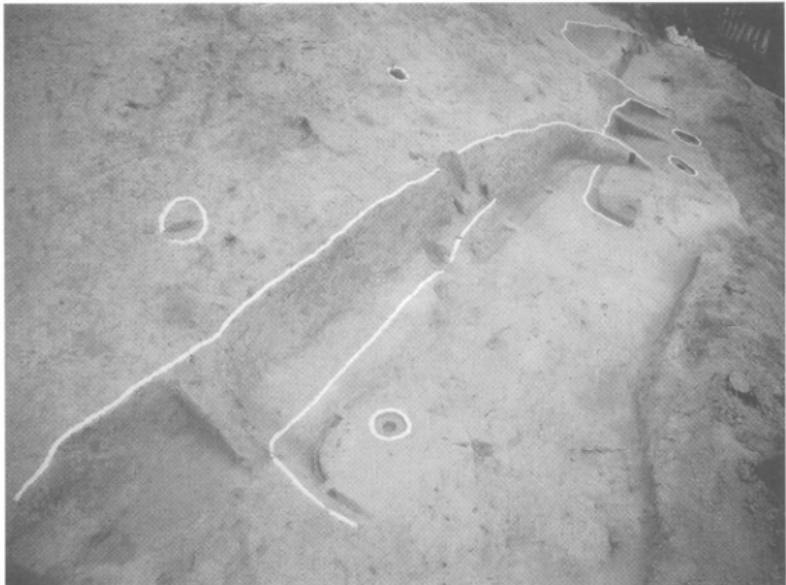
竪穴建物SH01遺物出土状況（南から）



竪穴建物SH02遺物出土状況（東から）



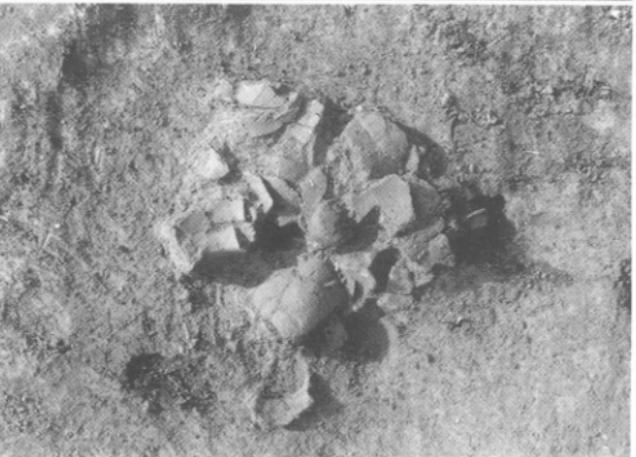
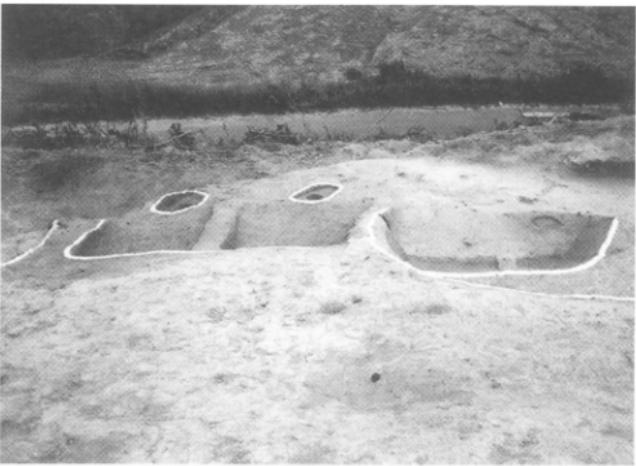
竪穴建物SH02遺物出土状況（北から）



竪穴建物SH03・SH11（南西から）



竪穴建物SH03遺物出土状況（西から）





西斜面遺構群（南から）

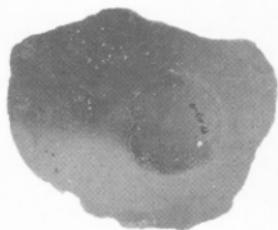


竪穴建物SH07（西から）



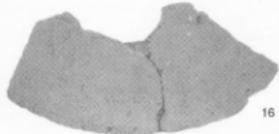
13

1



14

3



16

12



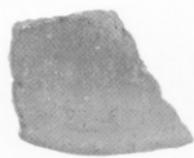
15



18



20



19

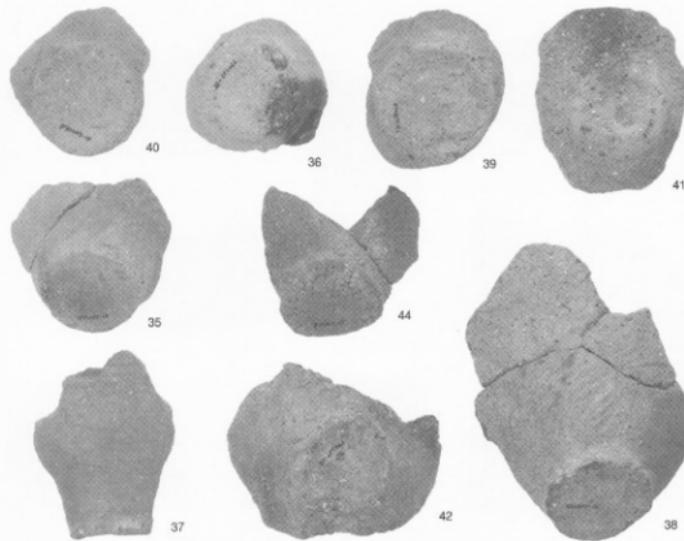
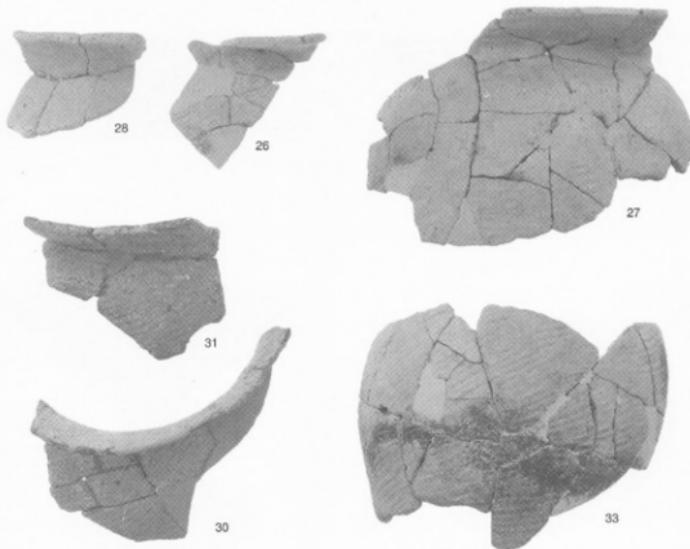


17

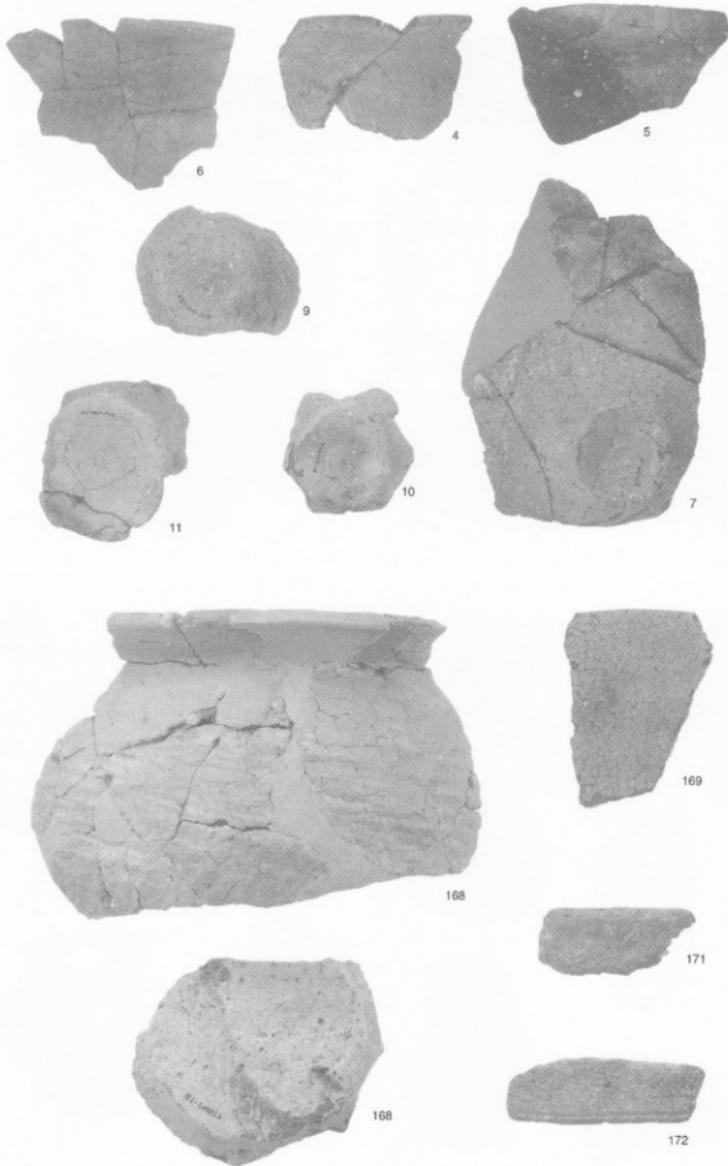
竪穴建物SH01出土土器

図版  
12

遺物



竪穴建物SH01出土土器



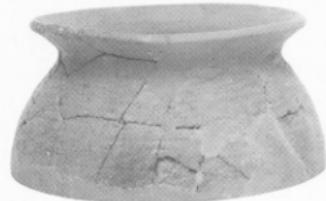
竪穴建物SH01・SH10出土土器



45



57



52



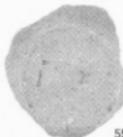
48



50



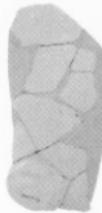
51



55



59



49



53



60



56



58



97



75



46



92



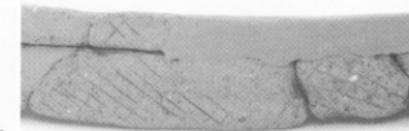
46

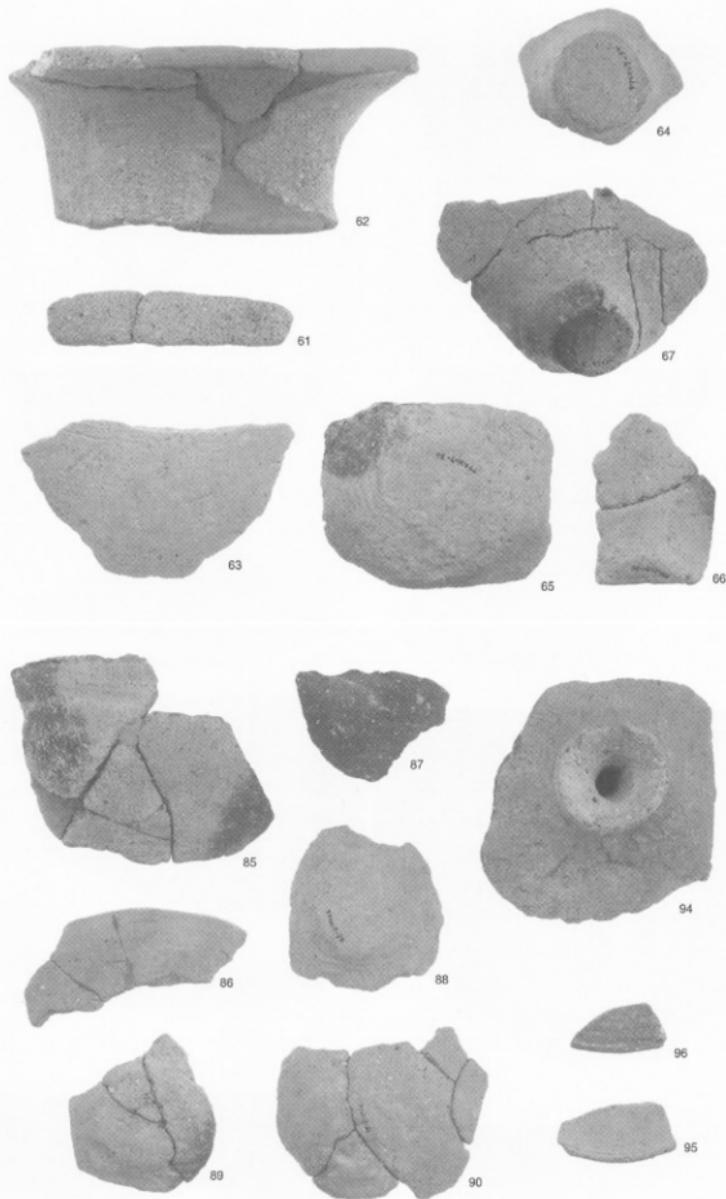


91

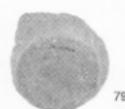
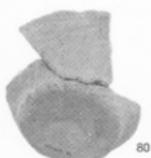
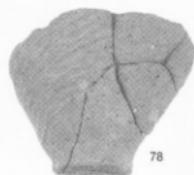
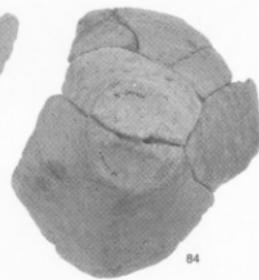
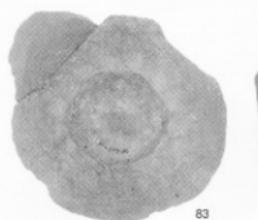
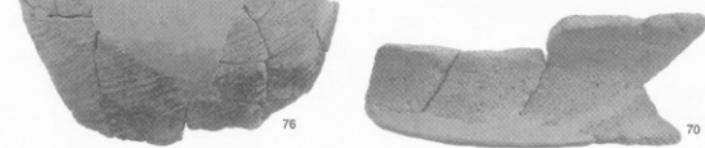
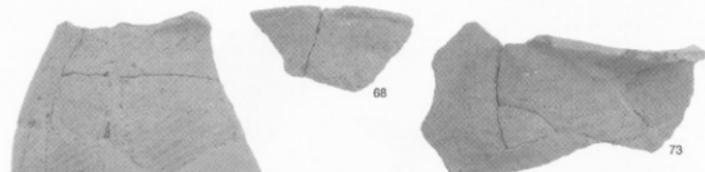


93

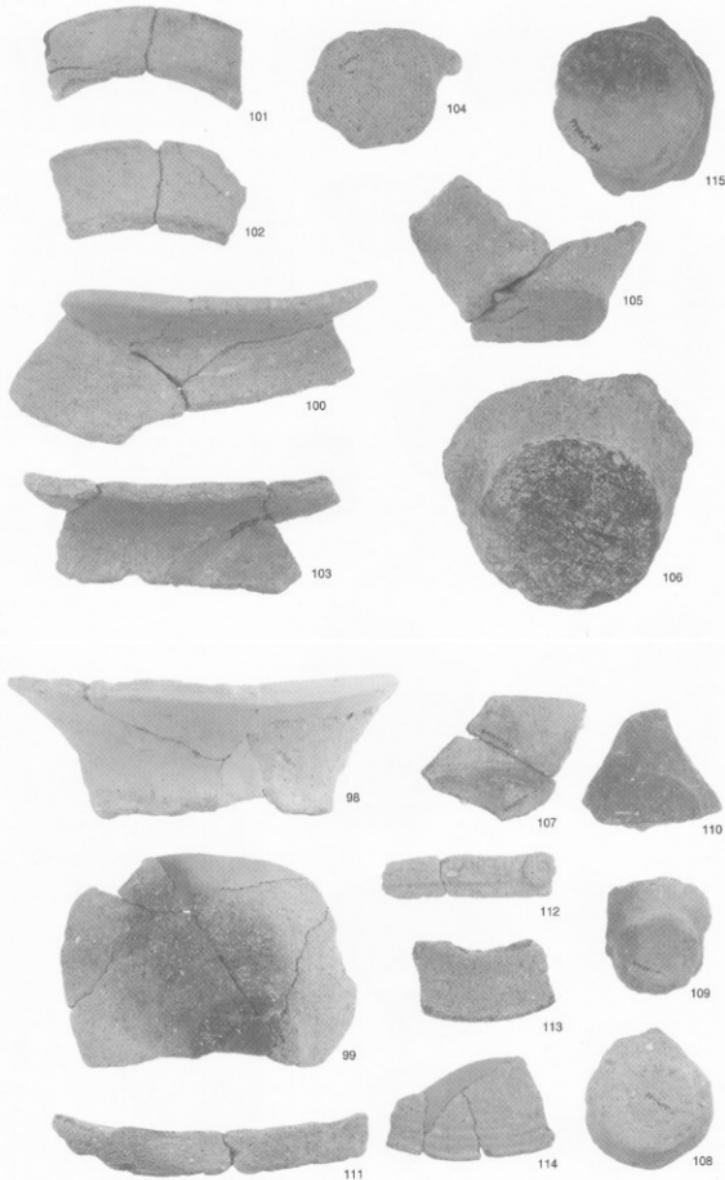




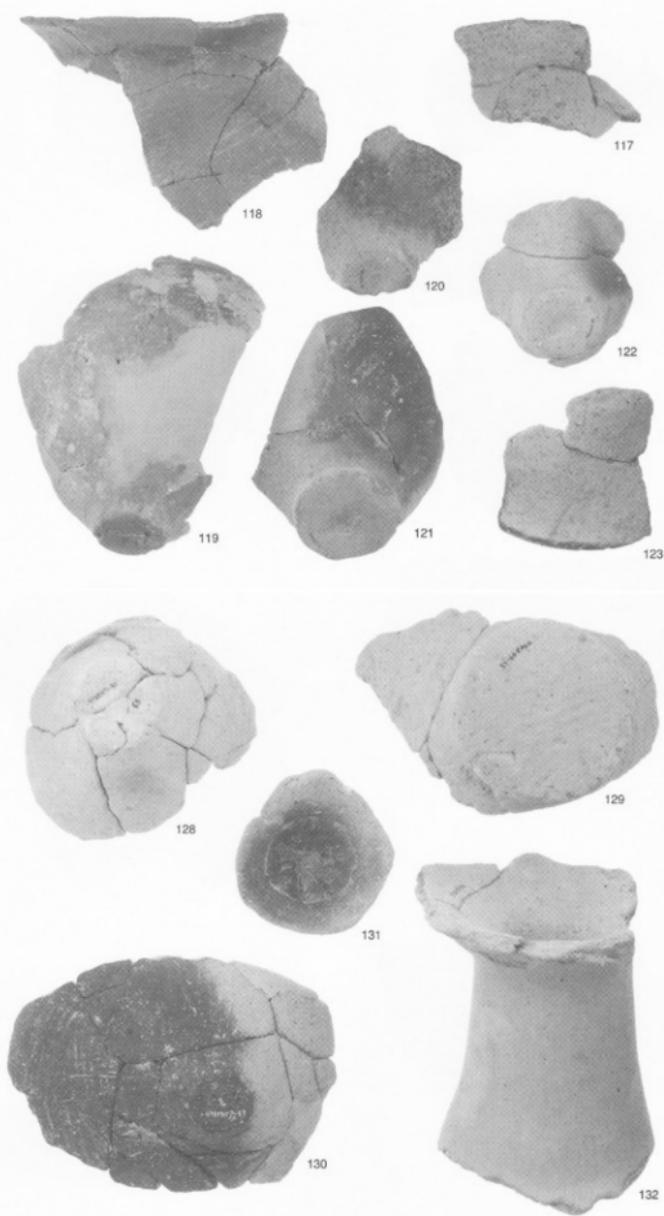
豎穴建物SH02土器群2出土土器



豎穴建物SH02土器群2出土土器



堅穴建物SH02出土土器



竪穴建物SH03出土土器



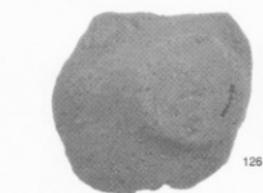
125



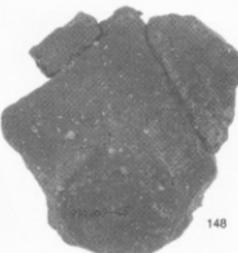
147



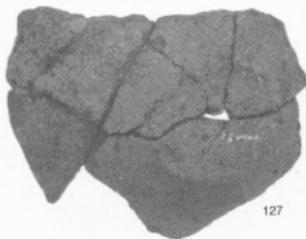
124



126



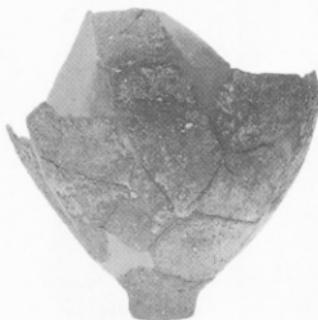
148



127



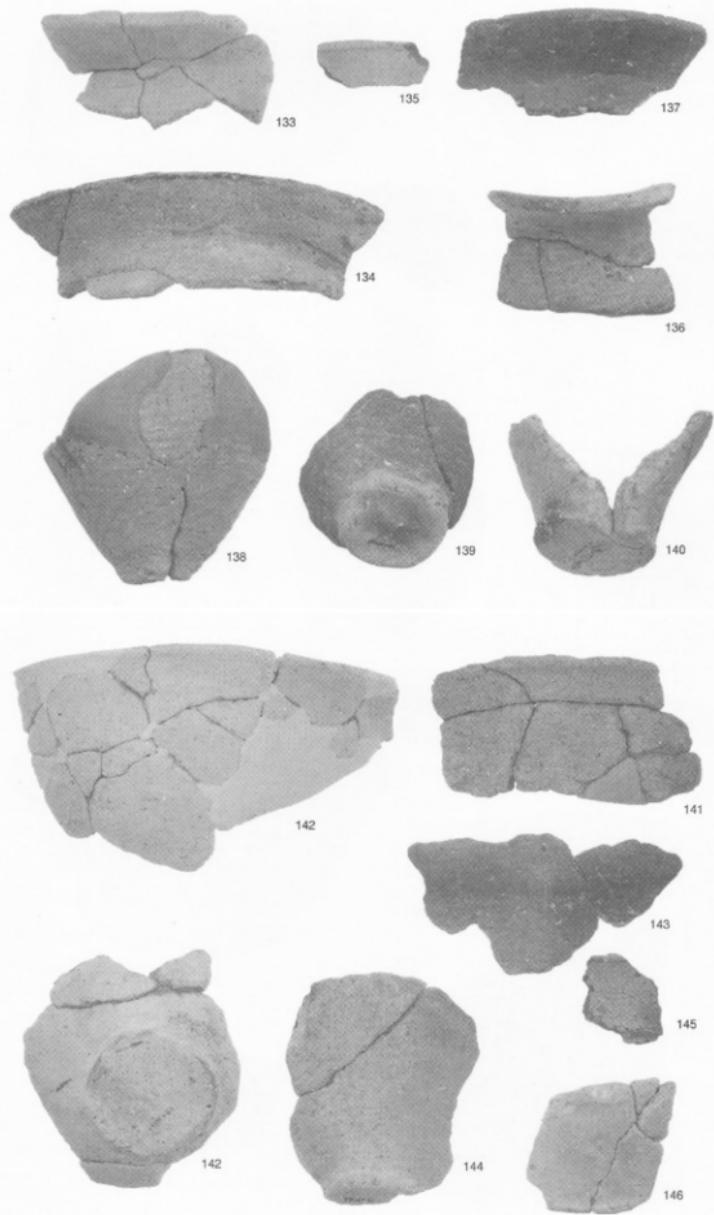
149



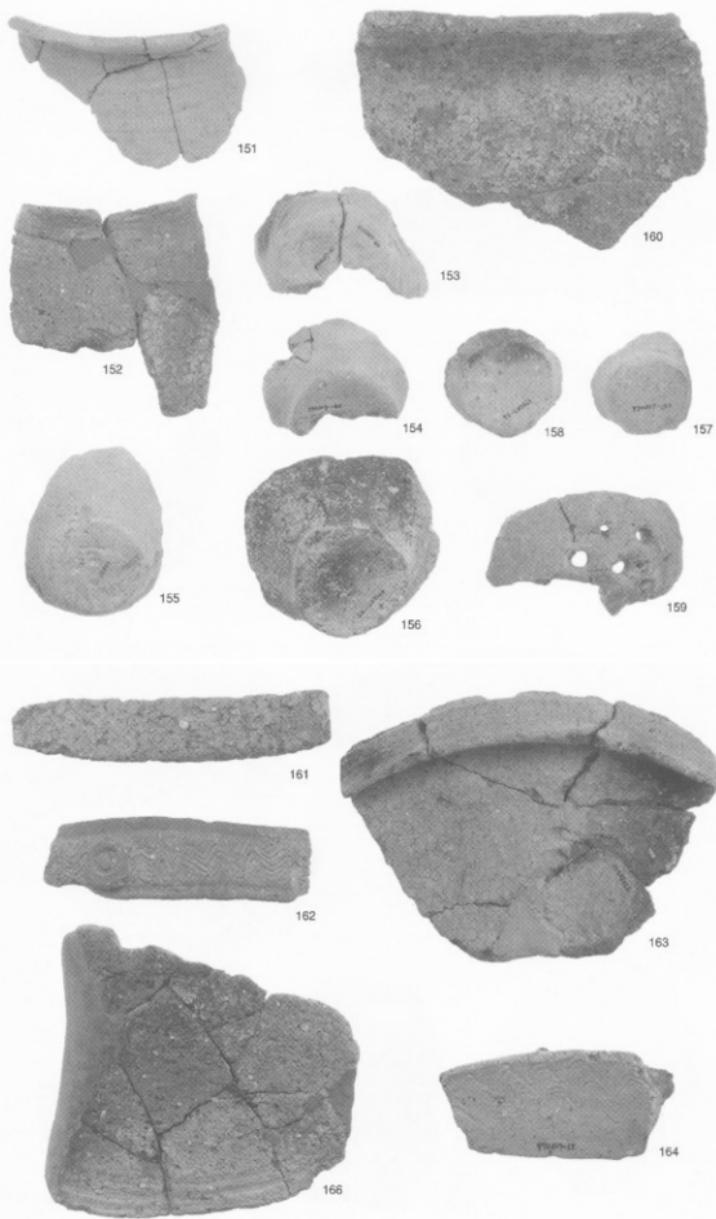
116



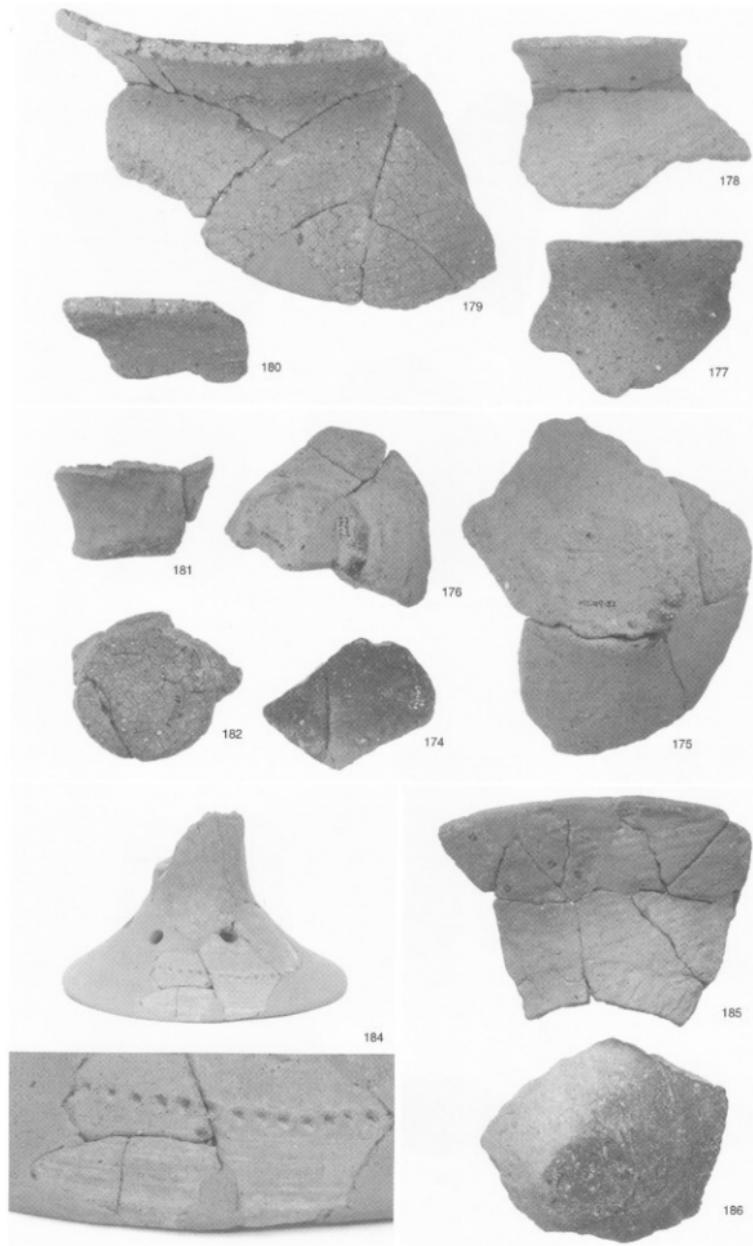
150



竪穴建物SH03出土土器



豎穴建物SH11出土土器



竖穴建物SH07・土器集中SX04出土土器



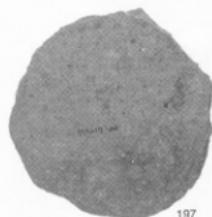
194



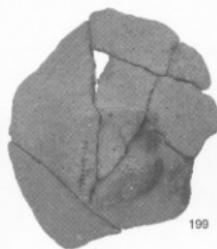
196



195



197



199



198



190



189



193



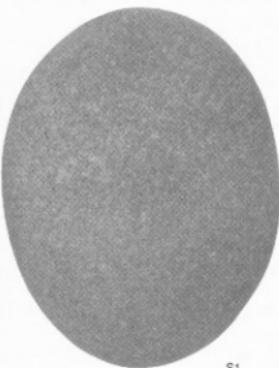
191



192



S2



S1

S3



S4

石器

## 報告書抄録

ふりがな	おぎわらいせき							
書名	おぎわら遺跡							
副書名	県道仁井黒谷線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第263冊							
編著者名	篠宮 正・柏原 正民・矢作 健二(バリノ・サーベイ)							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL. 078-531-7011							
発行年月日	西暦2004年(平成16年)3月18日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
おぎわら遺跡	ひょうごけんつなぐん 兵庫県津名郡 ほくだんちよ 北淡町	28683	970201 970207	35度 32分 54秒	134度 51分 23秒	19970528 19970623～ 19970702	14 m <sup>2</sup> 294 m <sup>2</sup>	県道仁井黒谷線 道路改良事業
久野々遺跡			970178 970359	35度 32分 38秒	134度 51分 48秒	19970527-28 19971112	27 m <sup>2</sup> 75 m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
おぎわら遺跡 (第3・4次)	集落遺跡	弥生時代	竪穴建物・土坑	弥生土器・石器				
久野々遺跡 (第6・7次)	集落遺跡	弥生時代	土坑・ピット	弥生土器・(石筆)				

---

兵庫県文化財調査報告 第263冊

## お ぎ わ ら 遺 跡

-県道仁井黒谷線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書-

平成16年3月18日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号  
TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会  
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 株式会社 旭成社  
〒651-0091 神戸市中央区若菜通5丁目1-16-280

---